

比 恵 57^{HI E}

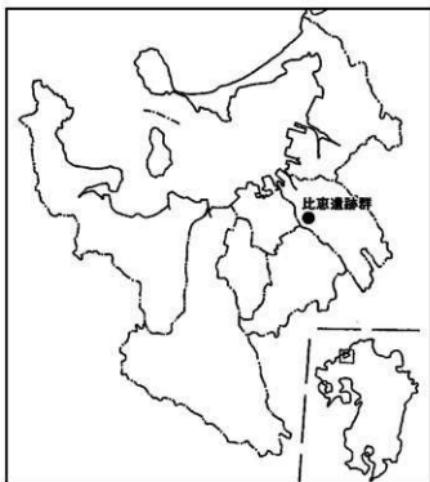
— 比恵遺跡群第114次調査報告 —

2010

福岡市教育委員会

^{HI} 比 ^E 恵 57

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1096集



調査番号 0801
調査略号 HIE-114

2010

福岡市教育委員会



1. 調査区 2 区全景(南東から)



2. 木樋 土層断面(南西から)



2. 木樋 出土状況(南西から)

序

現在、九州の中核都市として発展をつづける福岡都市圏の人口は、増加の一途をたどっています。

そして、これらにともなう開発事業等によって消滅していく遺跡も数多くにのぼっています。

本市では文化財の保護につとめ、これら開発によってやむなく失われる遺跡を記録として後世に残すため発掘調査をおこなっています。

本書もそうしたなかのひとつで、本市博多区博多駅南3丁目において発掘調査を実施した比恵遺跡群第114次調査の記録を収録したものです。

調査の結果、弥生時代を中心に、古墳時代・中世の集落が確認され、長きにわたって本地域が発展し続けた事を示す良好な資料を得ることができました。

調査に際し快くご理解とご協力をいただきました地権者である山崎逸子様には心よりお礼申し上げます。また、ご協力をいただきました関係者各位、地元をはじめ調査を支えられた多くの方々に深く感謝致します。この報告書が市民の皆様の文化財に対する認識とご理解につながり、また、学術の分野に貢献する事ができましたなら幸いに存じます。

平成22年3月23日

福岡市教育委員会
教育長 山田 裕嗣

例　　言

1. 本書は山崎逸子氏が実施した博多区博多駅南3丁目59番地内において民間開発とともに事前調査として、福岡市教育委員会埋蔵文化財第1課が平成20年度に実施した比恵遺跡群第114次調査の調査報告書である。
2. 発掘調査と整理報告書作成は共同住宅建設に伴う受託事業として行った。ただし、福岡市が定めた内規により、個人事業の際の125m分については国庫補助金適用とした。
3. 本書で用いる方位は国土座標第II系による座標北で、磁北はこれに6°西偏する。
4. 調査区は予定建物を基軸として任意の3m方眼グリッドを設定し、グリッド呼称は西交点とした。
5. 遺構の呼称は略号化し、堅穴住居→SC・不定形土壙→SX・井戸→SE・土廣→SK・溝→SD・柱穴→SPとした。
6. 本書に使用した遺構実測図は加藤良彦による。
7. 本書に使用した遺物実測図は加藤・平川敬治・井上加代子による。
8. 製図は井上加代子・米倉法子による。
9. 本書に用いた写真は加藤による。
10. 本書の執筆・編集は加藤が行った。
11. 本書にかかる記録類・遺物は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵管理されるので活用されたい。

本文目次

I.はじめに	1
1 調査に至る経緯	1
2 調査の組織	1
II.調査区の立地と環境	2
III.調査の記録	7
1 調査の概要	7
2 弥生前期の調査	10
3 弥生前期末～中期初頭の調査	23
4 弥生中期の調査	28
5 その他の出土弥生遺物	31
6 弥生終末～古墳前期の調査	33
7 中世の調査	42
IV.小結	44

挿図目次

Fig.1 周辺遺跡分布図(1/25,000)	3	Fig.16 SK10・18・29・30出土遺物実測図(1/3)	19
Fig.2 調査区位置図(1/4,000)	4	Fig.17 SK31出土遺物実測図(1/3)	20
Fig.3 調査区周辺量図(1/500)	5	Fig.18 SK35・46・58出土遺物実測図(1/3)	21
Fig.4 遺構全体図(1/200)・東壁土層断面図(1/50)	6	Fig.19 SD04・SP出土遺物実測図(1/3)	22
Fig.5 弥生前期遺構分布図(1/200)	7	Fig.20 弥生前期末～中期初頭遺構分布図(1/200)	23
Fig.6 SC07・16・20・22・51・(1/60) SD04土層断面実測図(1/40)	8	Fig.21 SK42・13・SX14(1/60)・SE54(1/40)実測図	24
Fig.7 SC07・16・20・22・51出土遺物実測図(1/3・2/3)	9	Fig.22 SK42・13・SX14・SE54・ SP出土遺物実測図(1/3・2/3・1/4)	25
Fig.8 SU19・21・23・28実測図(1/40)	11	Fig.23 弥生中期遺構分布図(1/200)	26
Fig.9 SU19出土遺物実測図1(1/3)	12	Fig.24 SC24・48・56実測図(1/60・1/40)	27
Fig.10 SU19出土遺物実測図2(1/3)	13	Fig.25 SC24・48・56出土遺物実測図(1/3)	28
Fig.11 SU19出土遺物実測図3(1/3・2/3)	14	Fig.26 SD25・57・SC61・D8SP2実測図(1/60・1/40)	29
Fig.12 SU21・23・28出土遺物実測図(1/3・1/4)	15	Fig.27 SD25・57出土遺物実測図(1/3)	29
Fig.13 SU37・40実測図(1/40)	16	Fig.28 弥生時代出土遺物実測図1(1/3)	30
Fig.14 SU37・40出土遺物実測図(1/3・1/4)	17	Fig.29 弥生時代出土遺物実測図2(2/3)	31
Fig.15 SK10・18・29・30・31・35・36・46・58実測図(1/40)	18	Fig.30 弥生時代出土遺物実測図3(1/3)	32

Fig.31	弥生終末～古墳初頭遺構分布図 (1/200)	33
Fig.32	SD01・02・03・06・ 34・43・62実測図 (1/60・1/80)	34
Fig.33	SD01出土遺物実測図 (1/3)	35
Fig.34	SD02出土遺物実測図 (1/3)	36
Fig.35	SD03・06・43・62出土遺物実測図 (1/3・1/4)	37
Fig.36	SD47・SX39 (1/80)・SK08・63 (1/40) 実測図	38

Fig.37	SX39上層出土遺物実測図 (1/3・1/6)	39
Fig.38	SX39・SK08・63出土遺物実測図 (1/3・1/6)	40
Fig.39	中世遺構分布図 (1/200)	41
Fig.40	SK60・SD05出土遺物実測図 (1/3)	41
Fig.41	SK60・SD05実測図 (1/40)	42

写真目次

Ph.1	1区全景 (南東から)	7
Ph.2	SC16 (南から)	10
Ph.3	SC16土器出土状況 (西から)	10
Ph.4	SU19・21・SC20・22 (南から)	10
Ph.5	SU19・SC20 (南から)	10
Ph.6	SU21 (左)・SC20 (右・北東から)	14
Ph.7	SU21土層断面 (北東から)	14
Ph.8	SU23 (南から)	16
Ph.9	SU28土層断面 (北東から)	16
Ph.10	SU28 (東から)	16
Ph.11	SU37 (北東から)	16
Ph.12	SU40 (北西から)	17
Ph.13	SK58 (左)・59 (右・北東から)	19
Ph.14	SK31 (左)・30 (右・北東から)	21
Ph.15	SD04土器出土状況 (南東から)	21
Ph.16	SK42 (南東から)	22
Ph.17	SE54 (左)・SK53 (南東から)	22
Ph.18	SC24 (南から)	23
Ph.19	SC24土層断面 (北から)	23

Ph.20	SC24炭化材出土状況 (南から)	24
Ph.21	SC24炉 (南東から)	24
Ph.22	SC24柱穴内 (南から)	26
Ph.23	SC48炉 (北西から)	26
Ph.24	SD57 (南東から)	26
Ph.25	SC56 (南西から)	26
Ph.26	D8SP2柱穴根がらみ (北西から)	28
Ph.27	SD01 (北から)	33
Ph.28	SD02 (北東から)	33
Ph.29	SD03 (北西から)	35
Ph.30	SD43 (右)・44 (左・南東から)	35
Ph.31	SD62 (南東から)	37
Ph.32	SX39 (南東から)	37
Ph.33	SX39土器出土状況 (北東から)	41
Ph.34	SK63 (北西から)	41
Ph.35	SK60 (北西から)	41
Ph.36	出土遺物. 1	42
Ph.37	出土遺物. 2	43

表目次

Tab. 1	遺構一覧表. 1	45
Tab. 2	遺構一覧表. 2	46

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

今回の調査は、福岡市博多区博多駅南3丁目59番において、山崎逸子氏より共同住宅建設計画の策定に当たって、平成19年10月9日に埋蔵文化財の有無の照会が埋蔵文化財第1課に提出された事により始まる。申請面積は612.12m²、受付番号は19-2-527である。

埋蔵文化財第1課で確認した所、申請地が比恵遺跡群の範囲内であり、内容など状況を把握するため同年11月29日確認調査を実施し、その結果弥生時代の竪穴住居・貯蔵穴を検出した。

同課では設計変更等での現況での保存が可能か申請者と協議を重ねたが、結果として保存は困難と判断した。よって遺跡の破壊を伴う建物部分に限定して記録保存のため発掘調査を実施する事となり、調査に関して同氏と教育委員会との間で委託契約が締結された。なお、福岡市が定めた内規により、個人事業の際の125m²分については国庫補助金適用とした。

発掘調査は平成20年4月7日に着手、同年6月20日に全ての行程を終了した。

調査番号	0801	遺跡略号	HIE-114
調査地地籍	博多区博多駅南3丁目59	分布地図番号	37（東光寺）0127
開発面積	612.12m ²	調査実施面積	376.6m ²
調査期間	080407～080620	事前審査番号	19-2-527

2. 調査の組織

【調査委託】 山崎逸子

【調査主体】 福岡市教育委員会 教育長 山田裕嗣

【調査総括】 文化財部長 矢野三津夫（当時） 埋蔵文化財第1課長 山口譲治（当時）
調査係長 米倉秀紀

【調査庶務】 文化財管理課 古賀とも子（20年度） 山本朋子（21年度）

【発掘調査】 加藤良彦

【発掘作業】 永田豊彦 原田 浩 藤村正勝 山中征生 浦 伸英 中村尚美 今村由利
北野宏行 近藤英彦 崎山幸義 濱口長治 米良恵美 元澤慶寛 結城敦雄

【整理作業】 国武真理子 塚田 慧

II. 調査区の立地と環境

本調査区(1)は福岡市の都心部より東へ2.8m、海岸線より南へ1.5kmの地点の、福岡平野の中央部を流れ
る那珂川と御笠川に挟まれた北側の洪積台地上に位置する。

本調査区が立地する比恵・那珂遺跡群は、春日丘陵から断続的に長く延びる阿蘇山の火碎流堆積物によ
る八女粘土層・鳥栖ローム層に覆われた洪積台地上に立地し、須玖遺跡群から井尻B遺跡・五十川遺跡・
本遺跡群へと連なり、殊に弥生時代から古代にかけて中枢域を示す重要な遺跡が分布する(Fig.1)。

本遺跡群は標高5~10m南北2.5東西1.0km程の範囲に広がり、台地縁辺部は那珂川・御笠川の開析作用に
より樹枝状の複雑な地形を成している。台地中央の東西方向の鞍部を挟んで便宜的に北部を比恵遺跡群・
南部を那珂遺跡群と呼称しており、本調査区は比恵遺跡群31次調査区で確認された東西方向の河川により
分離された北台地の北西端部、遺跡が東西二つの舌上に細く伸びる、西側支丘陵の基部に位置する
(Fig.2)。地表面標高は5.1mを測る。周辺では台地部で第4・26・28・68・98・115次調査、谷部で24・
25・32・80次調査など多数の調査が実施され、弥生時代前期~中期後半の時期を中心に、竪穴住居・貯蔵
穴・貯木土壤・井戸・溝水溜造構などが検出されている(Fig.3)。

遺跡群の歴史環境を概観してみると、後期旧石器時代ナイフ型石器・彫器が区画整理による削平の浅い
台地縁辺の比恵19次・那珂38・41次調査で検出され、散漫な分布を示す。繩文時代も同様で比恵30次調査
で前期の深鉢が検出されるのみである。遺構の初現は突堤文期からで、台地縁辺の低位部に展開し那珂37
次調査では二重環溝が掘削される。弥生前期は比恵では北西部を中心に、低位部に貯蔵穴・貯木土壤・水
溜造構等が、前期末以降中期には集落が縁辺部から高位部に拡大し竪穴住居・貯蔵穴等が各所に広がる。
また、集落周辺には豪棺墓群の形成も始まり、比恵6次調査では細型銅剣を副葬する中期初頭~前半の墳
丘墓が、那珂21次調査等でも中期中頃~後半の墳丘墓が検出されている。比恵東側沖積地の1次調査では
中期中頃~後期前半の水田が検出。中期中頃以降は中央部に集住が始まり井戸・掘立柱建物が出現する。
中期後半から後期に集落は爆発的に増加し、中期末~古墳時代前期前半をピークに遺跡範囲は100haを越
え列島最大級の遺跡となる。青銅器・ガラス工房関係の複数地点での出土・多数の直線的大溝・方形の
区画溝の掘削・井戸の大量掘削・銅鑄・銅製鋤先・鉄器・水銀朱原料(辰砂)の多数出土等多くのものが
高密度の拠点であることを、また広域の掘立柱建物群・半島系土器を含む広範囲にわたる外来系搬入土器
の出土等交易の大拠点であることを示している。古墳時代初頭前後には須玖岡本遺跡が衰退するなか、
交替に遺構が微増し、延長1.5kmにわたる並列二条溝(道路?)の掘削・方形周溝墓群と那珂中央には全
長85m九州最古期の那珂八幡前方後円墳の築造と、「奴国」の中枢の移動を示している。古墳時代前半以
降一時衰退するが、那珂で5世紀末に劍塚北前方後円墳築造以降集落が拡大し、6世紀代には竪穴住居と掘
立柱建物群が数カ所に広がり、6世紀後半の3重周濠全長140mの東光寺劍塚前方後円墳築造時には集落が
増大し、6世紀後半~7世紀中頃には比恵・那珂の集落から隔離した高所に多重柵列・大型掘立柱建物群が
數カ所で造営され、「那津官家」に関わる官衙的な建物群とされる。6世紀末以降官衙的な建物群は那珂
に収斂され、7世紀中頃~末には正方位の溝が縱横に掘削され、瓦・硯の出土等官衙的な内容を濃くす
る。比恵東の79次調査では水城東門ルートの官道が検出されている。8世紀、那珂では継続して中心的な
集落として維持されるが、比恵では減少する。



Fig.1 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

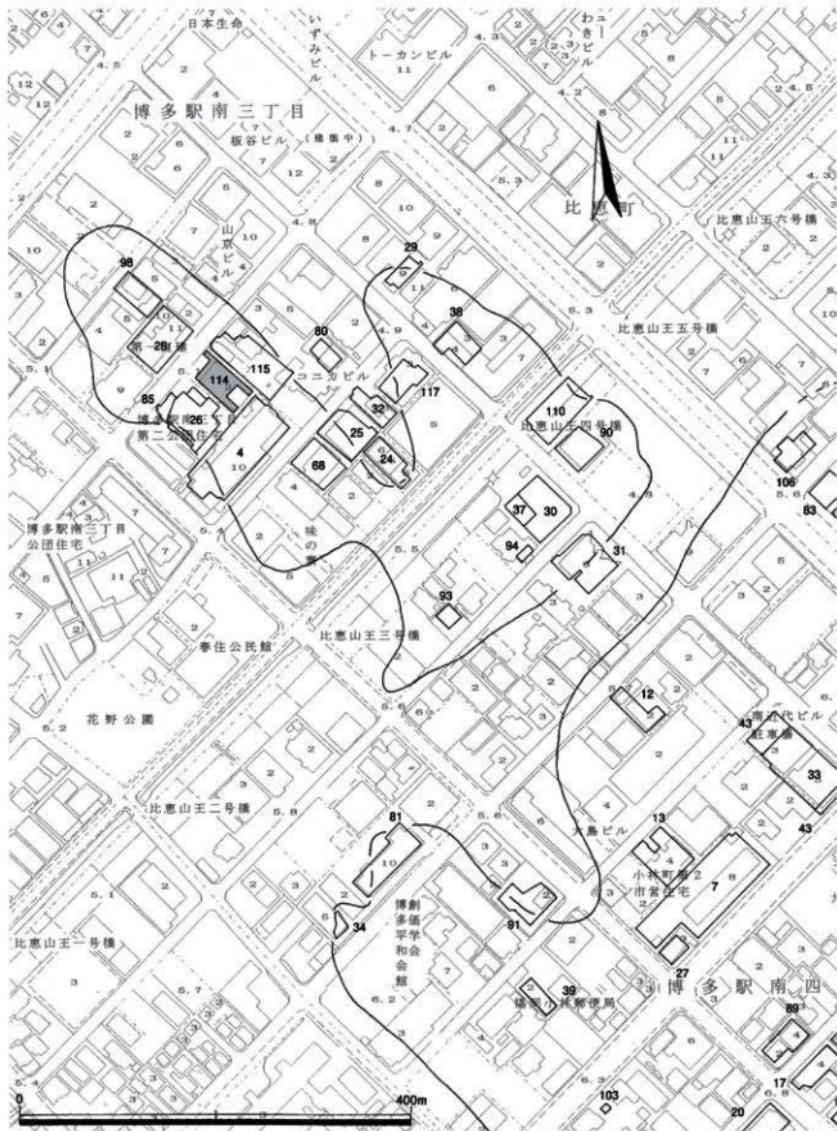


Fig2 調査区位置図 (1/4,000)

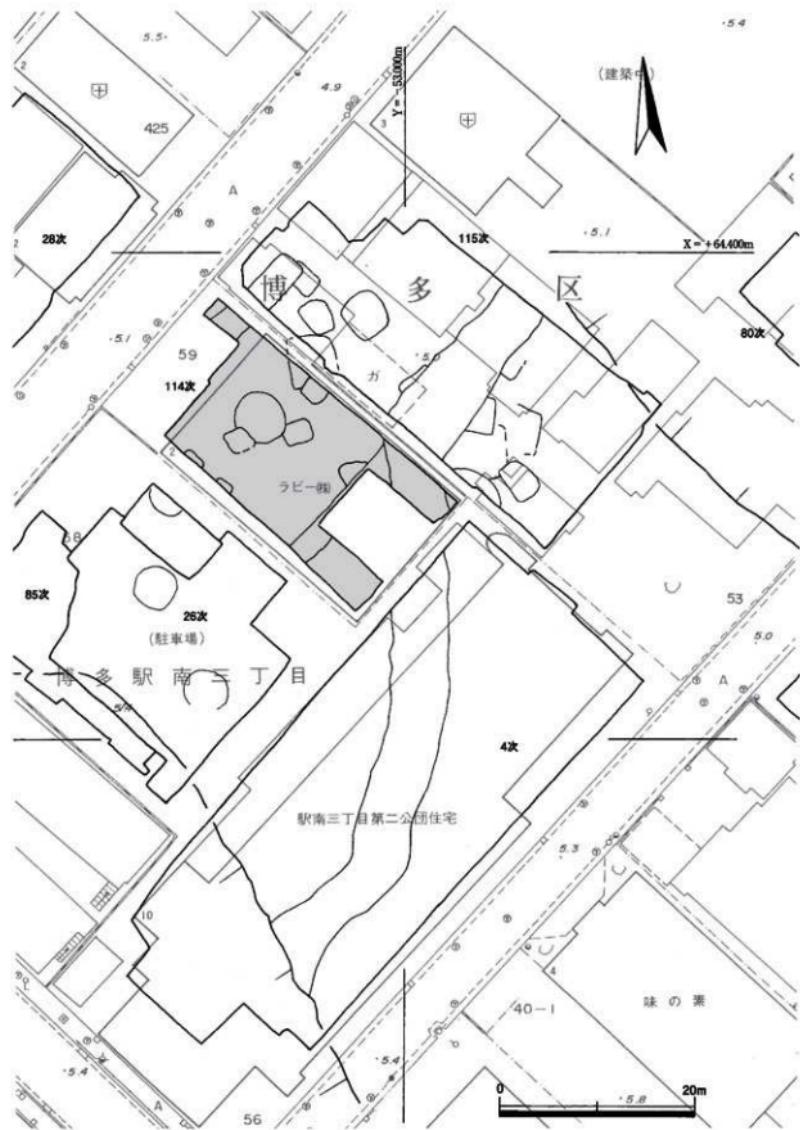


Fig.3 調査区周辺測量図 (1/500)

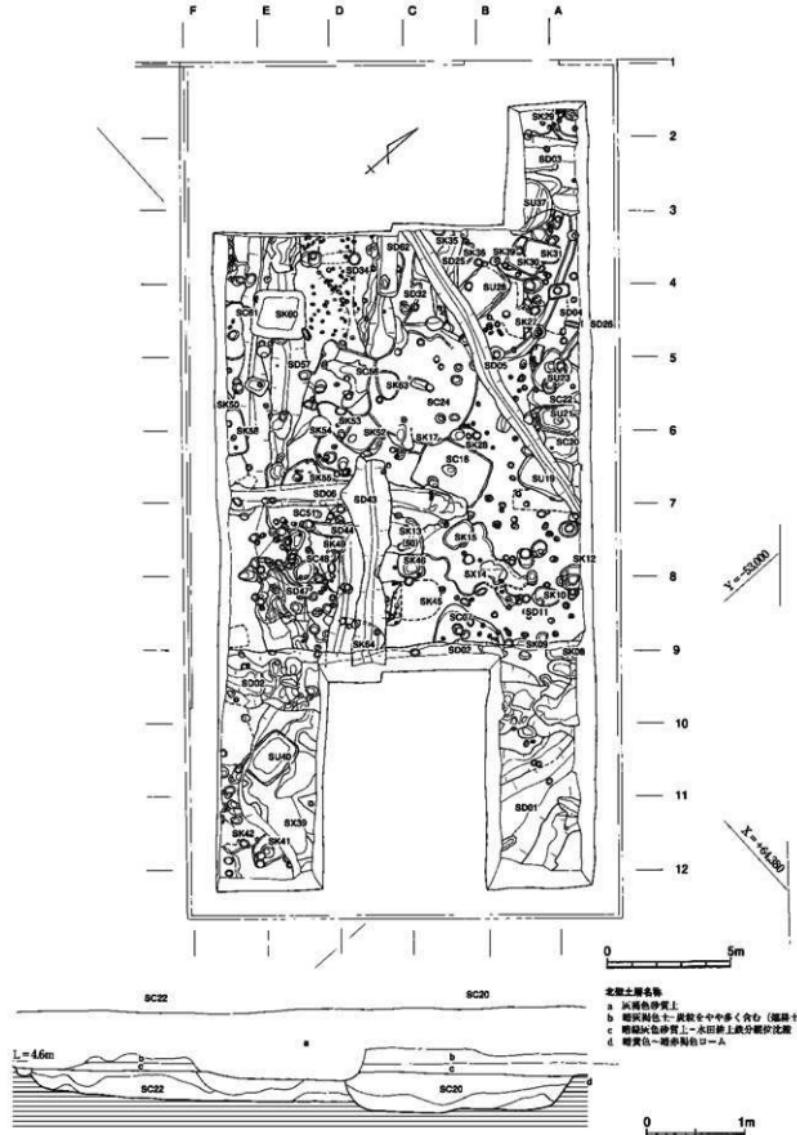


Fig.4 遺構全体図(1/200)・東壁土層断面図(1/50)

III. 調査の記録

1. 調査の概要

本調査区は比恵遺跡群北台地の北西端部、遺跡が東西二つの舌上に細く伸びる、西側支丘陵の基部に位置する。地表面標高は5.1mである(Fig.1~3)。

層序は(Fig.4) 40~50cmの表土・灰褐色砂質土客土(a層)・下に15cm程の暗灰褐色土の畑耕作土(b層)・10~15cm程の下面に鉄分が沈殿する暗緑灰色砂質土の水田耕土(c層)が堆積し、調査区南西側では15~20cm程灰褐色粗砂が堆積し、中世以降に洪水に見舞われた痕跡を残している。包含層は遺存せず暗黄褐色~暗赤褐色ローム(d層)上面が遺構検出面となる。

調査は遺構の破壊される建物部分に限定し、測量基準線は建物の基準線に合わせ、任意で3mグリッドを設定した。調査区を東西で二分し、排土を反転して調査を実施する事とし、東半部を調査1区として4月7日より重機による表土剥ぎに着手し、大雨による順延で12日より作業員を導入し遺構検出を開始した。5月25日に測量・実測を

完了し、同26日より重機による排土反転を開始し西半部・2区の表土剥ぎを実施した。6月18日に測量・実測を完了し、同日重機による埋め戻し、20日に調査機材を撤収し調査を完了した。

検出したおもな遺構は弥生時代前期竪穴住居5棟・貯蔵穴6基・土壙13基・溝2条・前期末~中期初頭土壙5基・井戸1基・不整形土壙1基・中期竪穴住居3棟・土壙2基・溝2条・前期~中期の竪穴住居1棟・土壙3基・溝1条・弥生終末~古墳時代前期前半溝10条・土壙3基・中世土壙1基・溝1条である。遺物は、各遺構から旧石器・弥生土器・石器・土師器・須恵器・貿易陶磁器などコンテナ20箱分検出している。

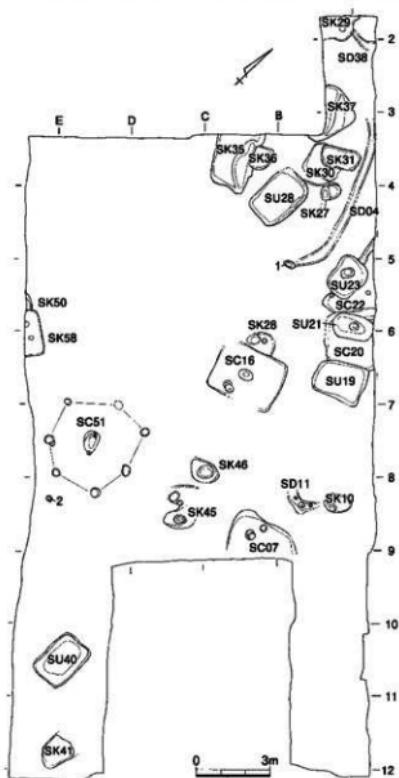


Fig.5 弥生前期遺構分布図(1/200)



Ph.1 1区全景(南東から)

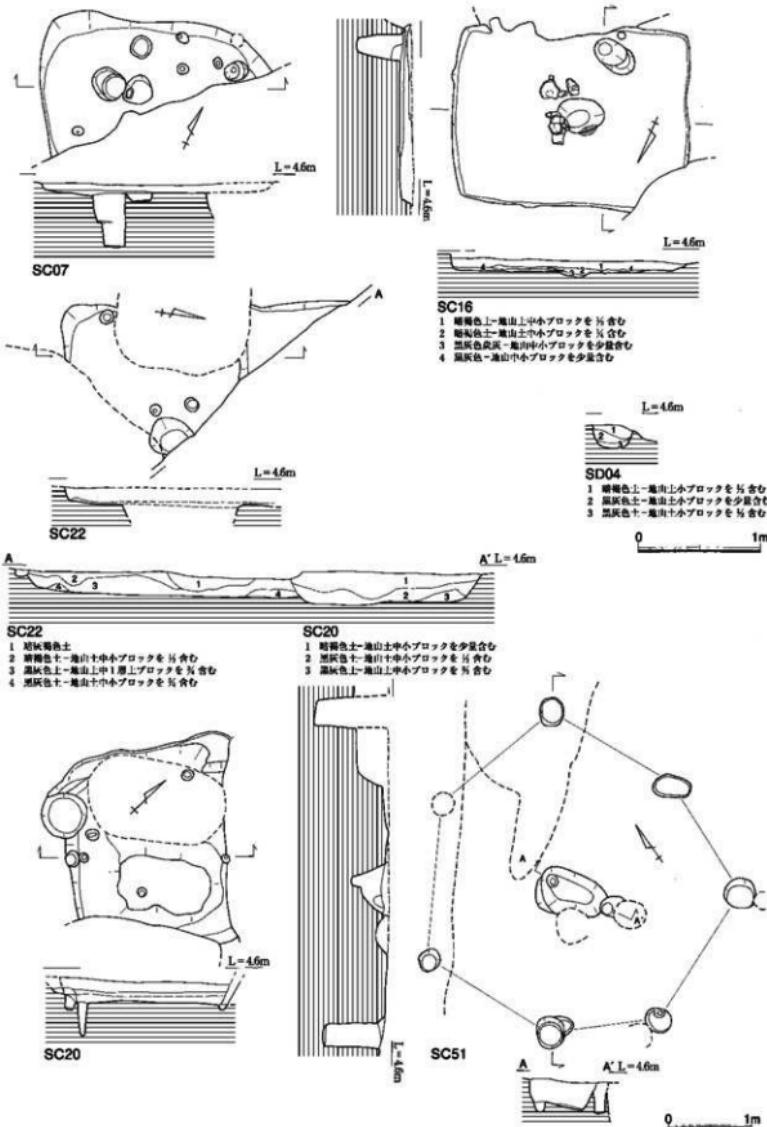


Fig.6 SC07・16・20・22・51・(1/60)・SD04土層断面実測図 (1/40)

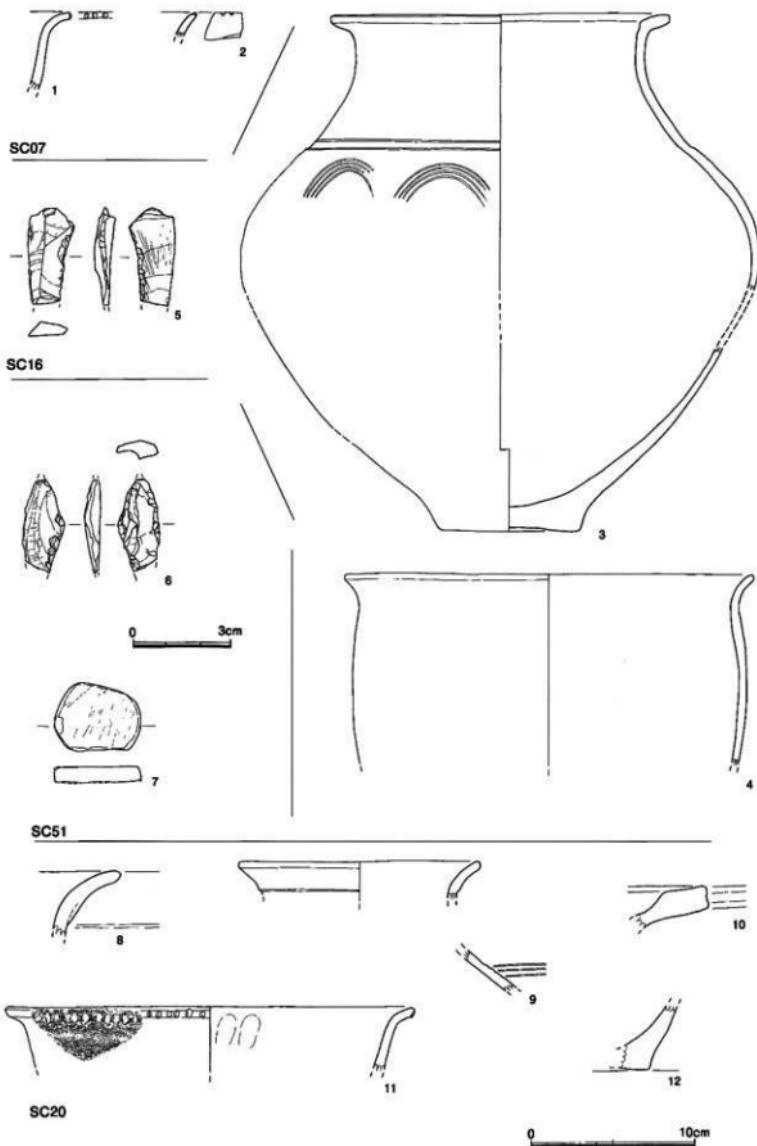
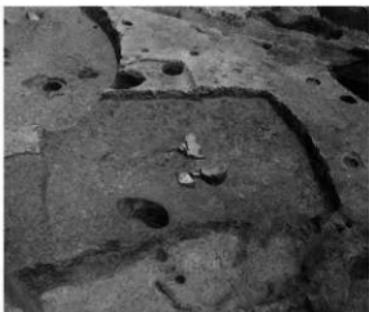


Fig.7 SC07·16·20·22·51出土遺物実測図 (1/3·2/3)



Ph.2 SC16(南から)



Ph.3 SC16 土器出土状況(西から)

2. 弥生時代前期の調査

前期の遺構は後半を主に、一見、幅10m程の南北方向のベルト状に集中する。竪穴住居5棟・貯蔵穴6基・土壙13基・溝2条を検出した。住居は方形で、住居と貯蔵穴は混在する。

1) 竪穴住居SC07 (Fig.5) C8グリッドに位置し、隅丸方形プランで大半をSD02に切られる。現況で $2.86 \times 1.68 + \alpha m$ ・深さ15cm程で、主柱穴は明確ではない。方位はN-78° -Eにとる。遺物は弥生土器が十数片出土 (Fig.7)。1・2はともに口唇全面刻みの壺小片で、前期前半。

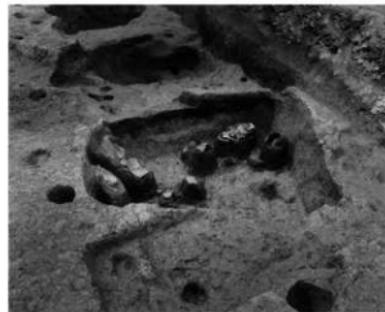
SC16 (Fig.5 Ph.2・3) C6グリッドに位置、SC24・SD06に切られ、 $2.9 \times 2.25 m$ 深さ15cm程で、柱穴1穴のみ。方位はN-70° -E。3~4cmの黒褐色粘土の貼り床から中央に 58×43 深6cmの炉穴を設け底面に3cm程炭灰が堆積。北側肩が一部火熱で赤変。壺が西側肩で破碎して出土。3がそれで (Fig.7)、肩部に重弧文と二重沈線を施し、浅い段をつくる。5は刃潰し加工の黒羅石削器。前期後半～末。

SC20 (Fig.5 Ph.4・5) B6グリッドに位置、SU19・SD05に切られ、SU20を切る。 $2.6 \times 2.0 + \alpha m$ 深さ25cm程で一部が調査区外。柱穴は不明。方位はN-35° -E。下半は地山土混じりの黒灰色土で埋められる。出土遺物は (Fig.7) 8は中型壺口縁で外面の段が不明瞭。橙色。9は小型壺で外面口縁下・肩部は明瞭な段を成し沈線3条施す。橙色。10は口縁内面が肥厚する大型壺で摩滅し刻目は不明。暗黄灰色。11は口唇下端に大きな刻目を施す壺。外面黒褐・内面暗褐色。前期後半。

SC22 (Fig.5 Ph.4) A5グリッドに位置、SU23・SC20に切られる。 $3.5 + \alpha \times 2.15 + \alpha m$ 深さ20cm程で隣地の115次調査区まで広がる。柱穴は不明。方位はN-10° -W。SC20同様下半は地山混じりの黒灰色土



Ph.4 SU19・21・SC20・22(南から)



Ph.5 SU19・SC20(南から)

で埋められる。遺物は壺の破片等が少量出土。前期後半か。

SC51 (Fig.5 Ph.4・5) 円形住居でE7グリッドに位置しSC48に切られる。炉穴と柱穴のみ残存。径30深70~90cm程の柱穴で、対面の柱間で4m。中央に90×56×33cmの炉穴を設け両端に12cm弱の小穴を設ける松菊里タイプで、壁面は被熱しない。出土遺物は (Fig.7) 少量の土器片と、6の両側に刃潰し加工を施し先端が欠損する黒曜石石錐と7の滑石製紡錘車未製品で周縁は面取り。41g。

2)貯蔵穴SU19 (Fig.8 Ph.4・5) いずれも隅丸長方形を呈するもので、SU19はB6グリッドに位置しSC20を切る。210×163×73cmを測り、四周から黒灰色粘質土が流入し40cm程堆積しこの面に沿って多くの土器片が出土する。上半は地山土混じりの暗褐色土で埋め戻す。出土遺物は (Fig.9 ~117) 13~25ま

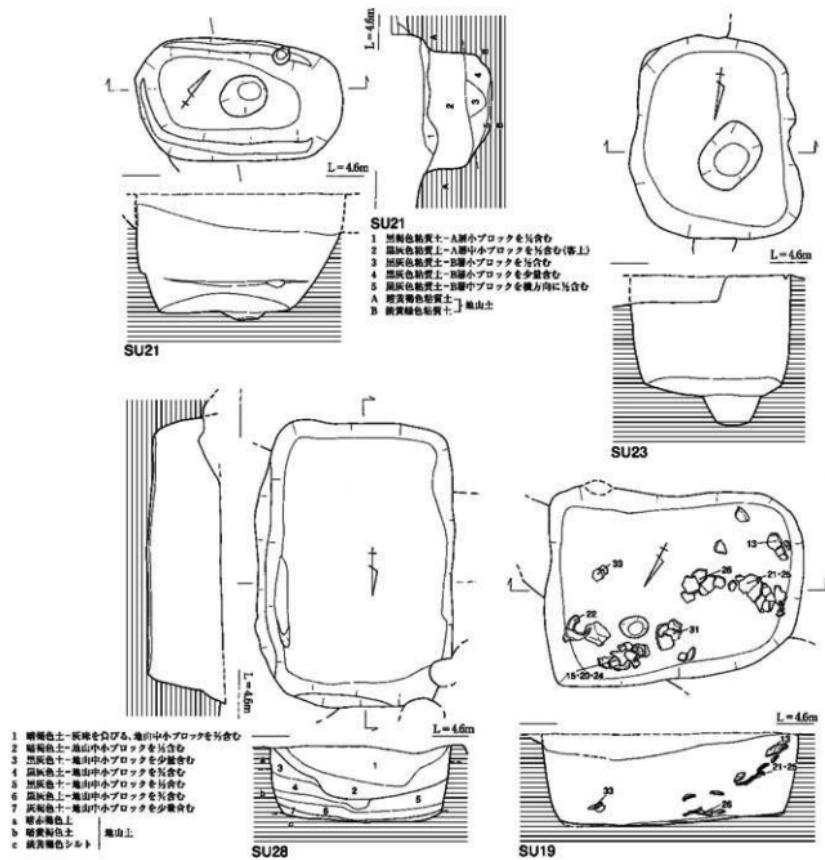


Fig.8 SU19・21・23・28 実測図 (1/40)

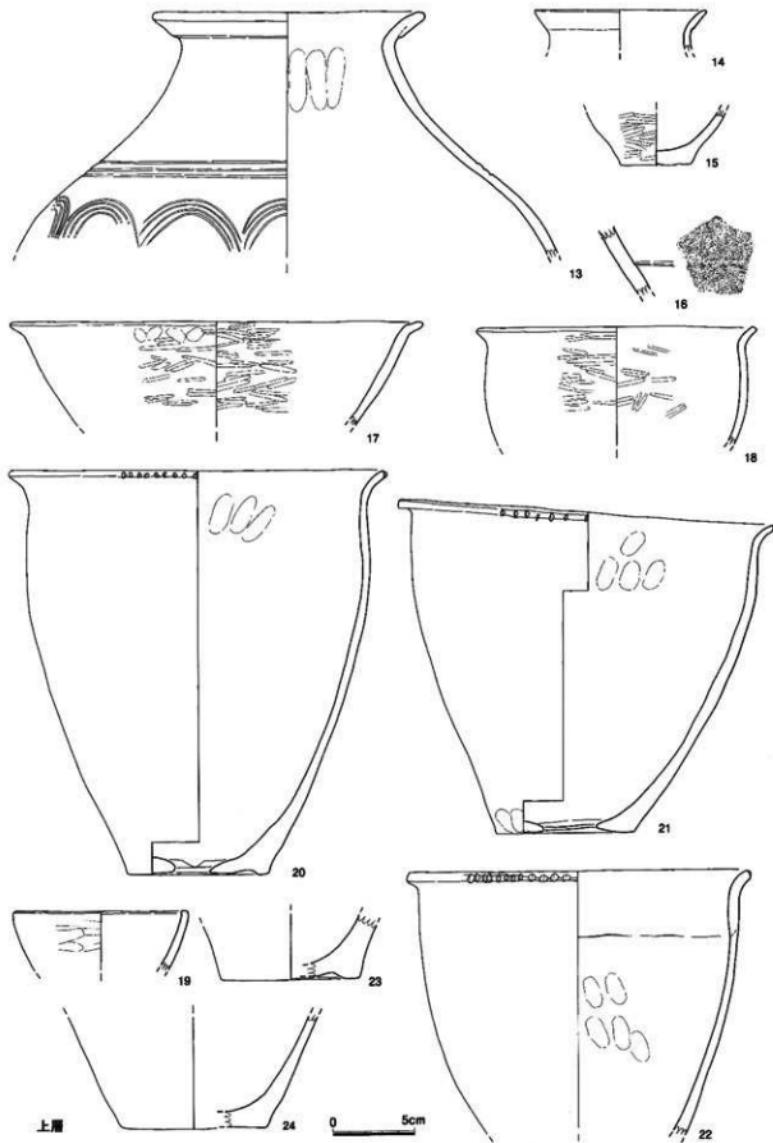


Fig.9 SU19 出土遺物実測図.1 (1/3)

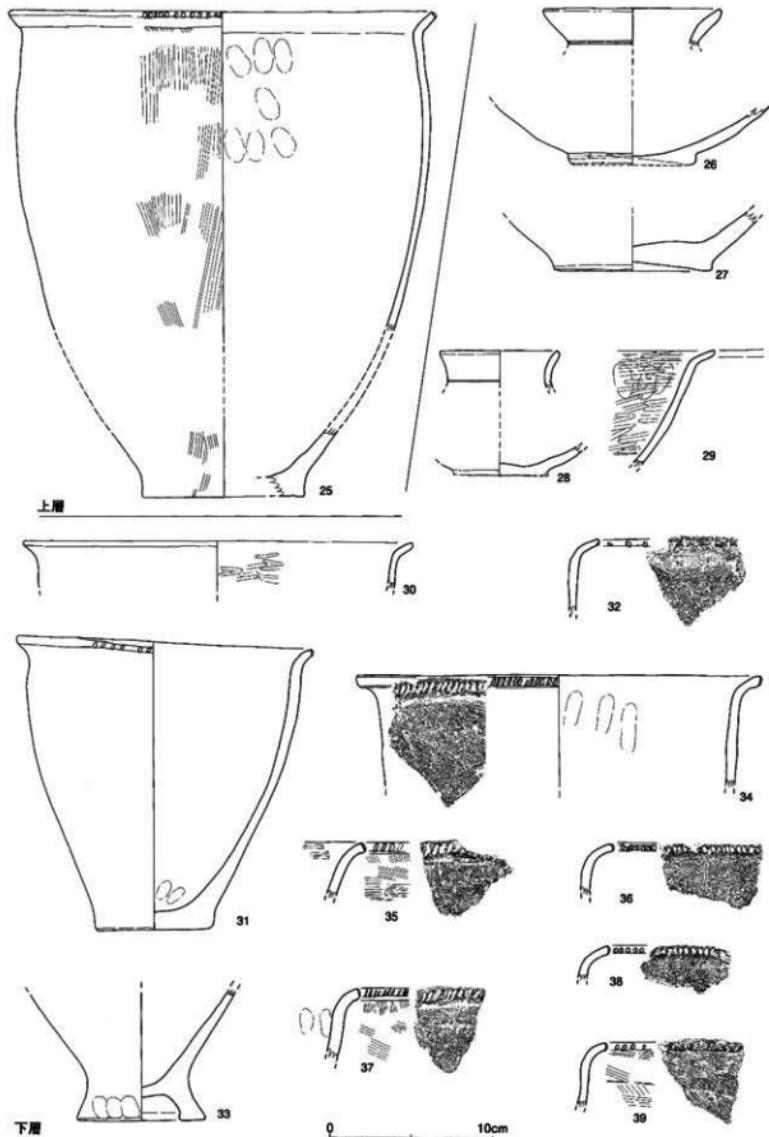


Fig.10 SU19 出土遺物実測図 2 (1/3)



Ph.6 SU21(左)・SC20(右・北西から)



Ph.7 SU21 土層断面(北東から)



Fig.11 SU19 出土遺物実測図.3 (1/3・2/3)

で上層出土。13~16は壺。13口唇外面の段は緩く肩部段は3条の沈線化。以下にヘラ描き4重弧文。鈍い黄橙色。14の段も緩い。16は大型壺肩部で沈線様の低い段。灰黄褐色。17は高坏か内外面をケンマ。外橙色内鈍い橙色。18・19は鉢で内外面をヘラナデ。被熱しない。20~25は壺。20・21・22は口唇下端に25は全面に刻目。20・21は外面上位に煤が付着21は上位が大きく剥離。22は内面上位に炭化物が付着。外面下半は被熱で剥離。20・21は底部に2.0~3.1cmの焼成後の穿孔で瓶に転用。26~39は下層出土。26~28は壺。26・28は口縁外面は沈線化するが底部は低い円盤状。28は沈線内に赤色顔料が遺存。29は鉢か高坏で内外ケンマ・外面に黒色顔料。30~39は壺。32は口唇下端に31・34~39は全面にハケメ具刻目。34・35・37・39はナナメ・ヨコの条痕様の細かなハケメ。31は外面上位に煤が付着下位が剥離。壺は前半期が多数。40・41は土器片円盤。9g・72g。40は紡錘車未製品。42~45は黒耀石石器・角礫素材。42は石錐で先端欠損。43は主剥側からの全調整の削器。44・45は石核。44は右側面の打面調整に擦り。45

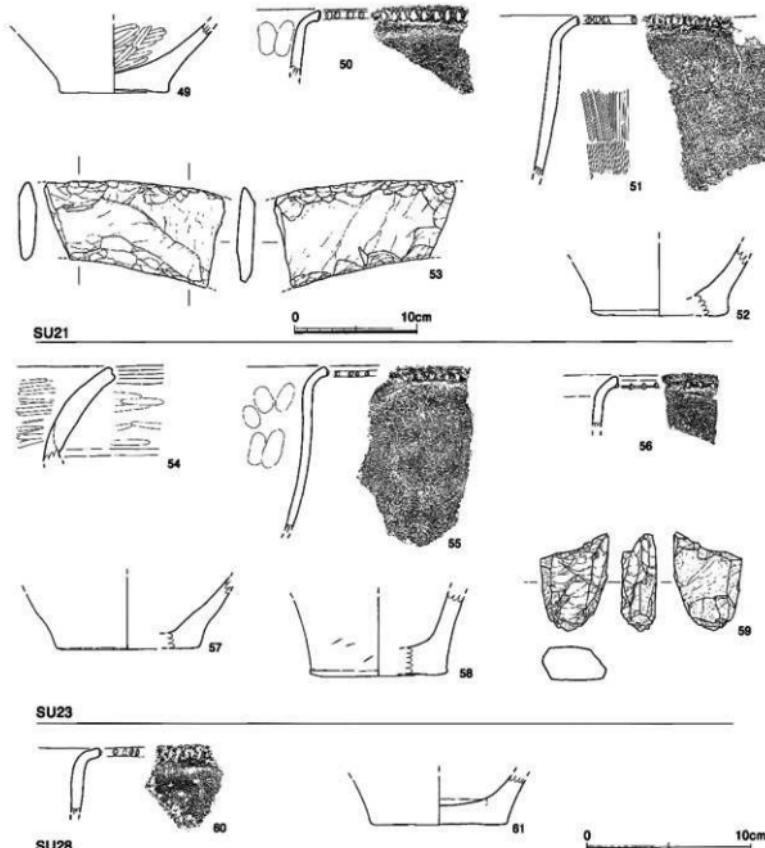


Fig.12 SU21・23・28 出土遺物実測図 (1/3・1/4)



Ph.8 SU23(南から)



Ph.9 SU28 土層断面(北東から)



Ph.10 SU28(東から)



Ph.11 SU37(北東から)

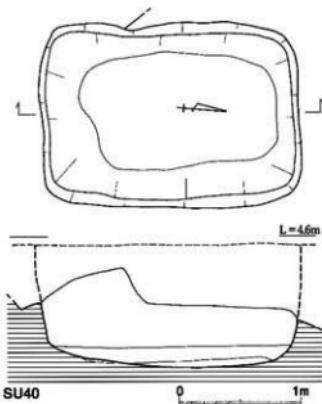
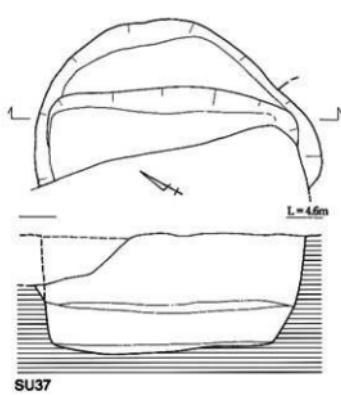


Fig.13 SU37・40 実測図 (1/40)

は2方から階段状剥離。46は縁泥片岩製石包丁未製品。47は刃部折損の玄武岩製扁平打製石斧。全面調整で上位両側に紐掛けのノッチ。折損面を再調整。48は砾岩の上下面使用叩石兼用砥石。獣骨が若干出土。前期後半。

SU21 (Fig.8 Ph.6・7) A5グリッドに位置しSC20に切られる。169×100×95cmを測り、3方の中位に

小さなテラスを底面に径38深6cmの窪みを設ける。3層まで自然堆積後再掘し上半は地山土混じりの黒灰色粘質土で埋め戻す。出土遺物は (Fig.12) 49は壺底部で内面黒色磨研外面板ナデ明褐色。50～52は壺。50は外面上位に煤付着。52は内面炭化物付着。53は玄武岩製石鎌で上下端を両面調整。刃部が摩耗し打製で使用。前期後半。

SU23 (Fig.8 Ph.8) B5グリッドに位置しSC20を切る。164×140×98cmを測り、底面に径55深25cm程の円穴を設ける。30cm程黒灰色粘質土が自然堆積後、地山土混じりの暗褐色土で埋め戻す。出土遺物は (Fig.12) 54は大型壺口縁部で口縁外側



Ph.12 SU40(北西から)

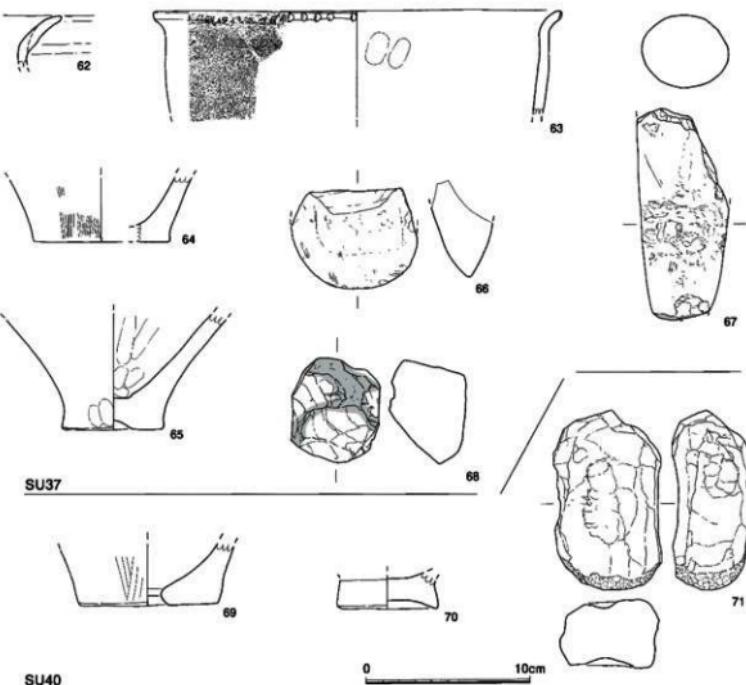


Fig.14 SU37・40 出土遺物実測図 (1/3)

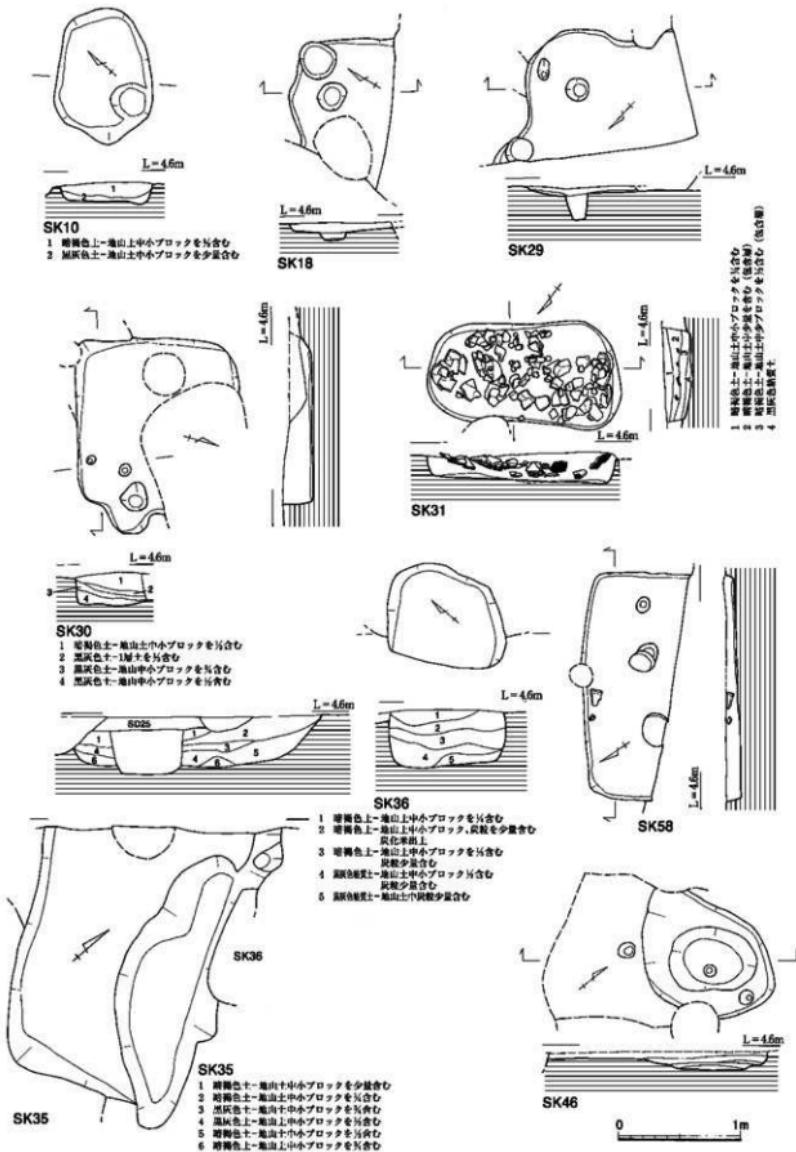


Fig.15 SK10・18・29・30・31・35・36・46・58実測図 (1/40)

の段は緩い。内外ヨコヘラナデ。灰黄褐色。55～58は甕。55・56は口唇下端に刻目。外面上位に煤付着。58は内面が黒変。59は黒耀石角砾の石核で自然面の打面から2面に剥離。前期後半。

SU28 (Fig.8 Ph.9・10) B4グリッドに位置しSK27を切る。253×163×60cmを測る。底面に灰褐色土が薄く堆積し、黒灰色土が堆積後一度客土を成し（5・6層）再度堆積後、地山土混じりの暗褐色土で埋め戻す。出土遺物 (Fig.12) 60・61は甕。60は口唇全面刻目・外面に煤付着。前期前半。

SU37 (Fig.13 Ph.11) B2グリッドに位置しSD03に切られる。236×107+ α m×95cmを測り中位に幅60cm程の半円形テラスを設ける。出土遺物 (Fig.14) 62は壺口縁で外面の段は緩い。橙色。63～65は甕で63は口唇下端に大きな刻目。65は中期初頭の混入。66は折損した玄武岩太型蛤刃石斧刃部。先端は幅3mm程に摩耗。67は緑泥片岩製石斧転用の石斧。折断面を叩きに基部を擦りに使用。赤色顔料が薄く遺存。68は石英粗面岩の飛碟転用の叩石。全面剥離の後線が摩耗。238g。前期後半。

SU40 (Fig.13 Ph.12) E10グリッドに位置しSX39に切られる。213×152×100cmを測る。底面は緩い船底型を呈す。出土遺物 (Fig.14) 69は甕転用の瓶。底面に焼成後の径2cmの穿孔。70は夜白式浅鉢底部。71は被熱礫岩の凹石。側面が凹み下面を叩きに使用。前期前半。

3).土壤SK10 (Fig.15) B8グリッドに位置し112×82×15cmを測る。黒灰色土が堆積し、地山土混じりの暗褐色土で埋める。出土遺物 (Fig.16) 72は甕転用の瓶。底面に径2cmの穿孔。前期前半。

SK18 (Fig.15) C6グリッドに位置しSC16・24に切られる。124+ α ×85+ α ×7cmを測る。方形住居の可能性もある。出土遺物 (Fig.16) 73は甕転用の瓶。底面に焼成前の径1.7cmの穿孔。内面に炭化物付着。74は砥石転用の凝灰質安山岩ホルンフェルス製の扁平片刃石斧。前期前半。



Ph.13 SK58(左)・59(右)・北東から)

SK29 (Fig.15 Ph.14) B1グリッドに位置しSD03に切られSD38を切る。130+ α ×103+ α ×5cmを測る。方形住居の可能性もある。出土遺物 (Fig.16) 75はヘラ書き重弧文の壺。前期後半。

SK30 (Fig.15 Ph.14) B3グリッドに位置しSK31に切られる。正方形で140×135×26cmを測る。地山土混じりの黒灰色土で客土し（4・3層）黒灰色土堆積後暗褐色土で埋め戻す。出土遺物 (Fig.16) 76は甕で口唇下端に刻目を外面に条痕様の細かなハケメを施す。前期後半。

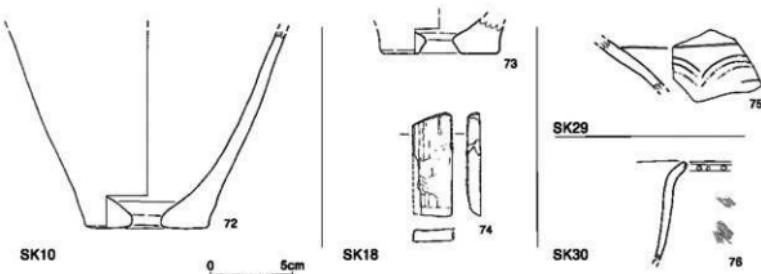


Fig.16 SK10・18・29・30出土遺物実測図(1/3)

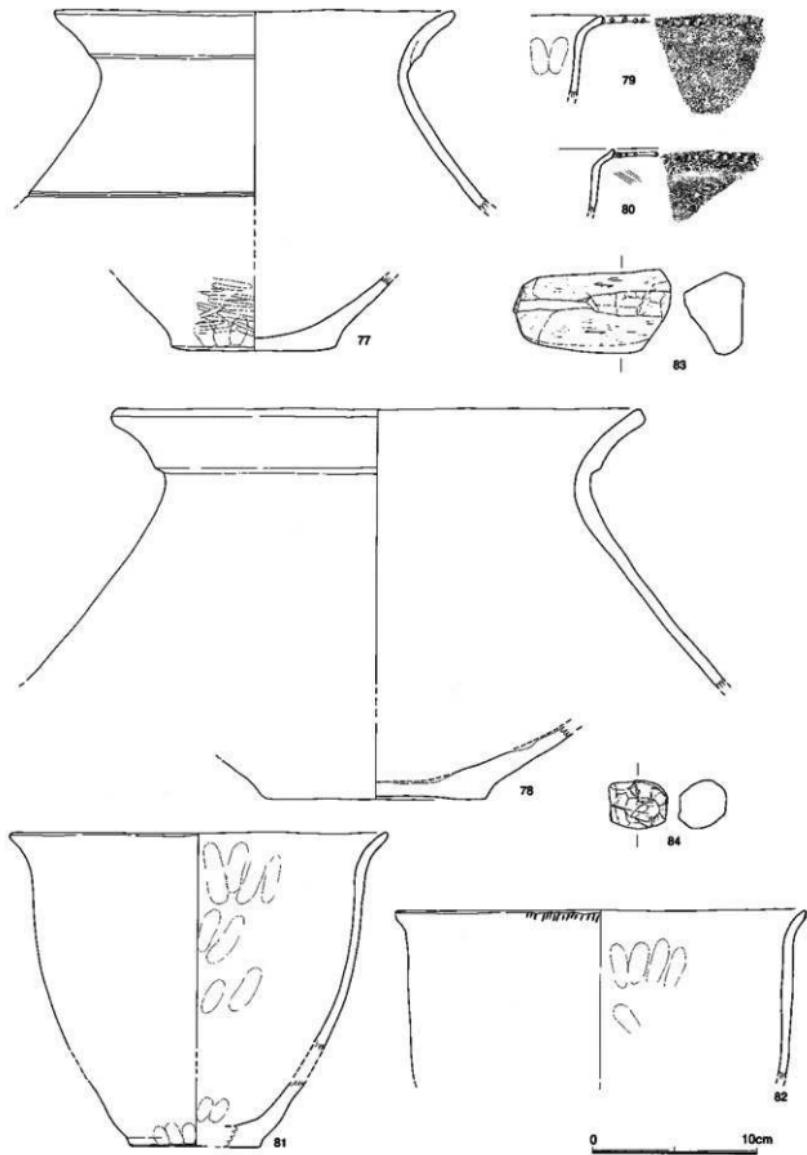


Fig.17 SK31出土遺物実測図 (1/3)



Ph.14 SK31(左)・30(右・北東から)



Ph.15 SD04 土器出土状況(南東から)

SK31 (Fig.15) B3グリッドに位置しSK30を切る。158×88×18cmを測る。黒灰色土堆積後地山土混じりの黒灰色土で客土し（3層）多量の土器を含む暗褐色土が堆積する。出土遺物（Fig.17）77・78は中・大型の壺でもともに口縁外面の段は緩く77の肩部は沈線化する。79～82は壺で79・80・82は口唇下端に刻目を80は外面に条痕様の細かなハケメを、82は内面に炭化物が付着。83は粗粒砂岩製砥石で側4面を使用。84は全面調整剥離の砂岩飛鏢で37g。前期後半。

SK35 (Fig.15) C3グリッドに位置しSD25・SK36に切られ265+ α ×172×18cmを測る。底面と中位で2度客土を行い（3・4・6層）暗褐色が堆積、2層中から炭化米が少量出土。出土遺物（Fig.18）85は壺で緩い段に3条沈線後下に羽状文。86～88は壺で88は段に刻目下は窓あき。前期後半。

SK36 (Fig.15) C3グリッドに位置しSD25に切られSK35を切る。98×80×48cmを測る。覆土は4層客土後は自然堆積で2層暗褐色土中から炭化米が少量出土。遺物は壺が少量。前期後半。

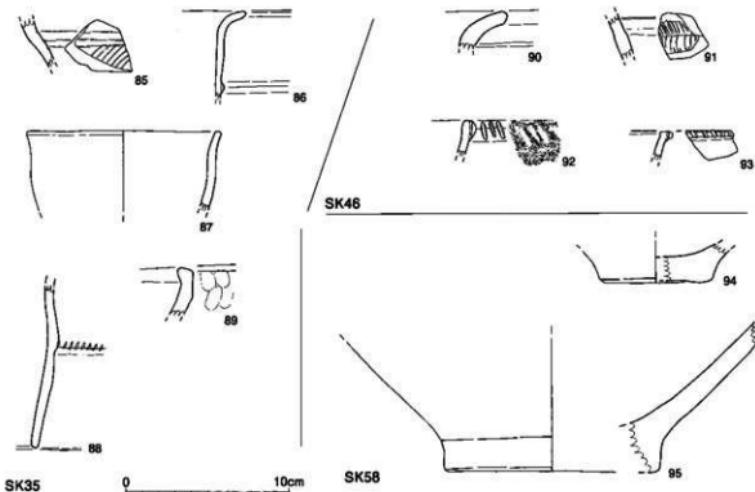


Fig.18 SK35・46・58出土遺物実測図 (1/3)

SK46 (Fig.15) D7グリッドに位置しSK13・45に切られる。 $188+\alpha \times 118+\alpha \times 5$ cmを測り一部が径115深10cm程窪む。形態から住居の可能性もある。出土遺物 (Fig.18) 90・91は壺で90の段は緩い。91は肩部の緩い段下に無段の貝殻羽状文。92・93は夜臼式IIB深鉢口縁片。前期後半。

SK58 (Fig.15 Ph.13) F6グリッドに位置しSK59に切られ $186 \times 77+\alpha \times 10$ cmで形態から方形堅穴住居の可能性もある。出土遺物 (Fig.18) 94・95は壺底部。前期後半。

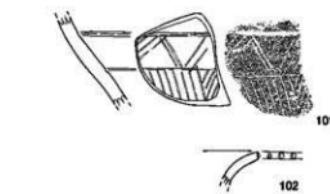
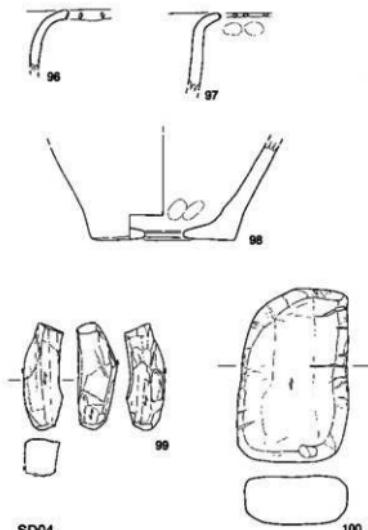
4)溝SD04 (Fig.6 Ph.15) B4グリッドに位置し幅35深18cmを測り、7m程の隅丸方形状に屈曲しSD03・05に切られる。出土遺物 (Fig.16) 96・97は壺。口唇下端に小さな刻目。98は壺転用の瓶。底面に径2.4cmの穿孔。99は凝灰質安山岩ホルンフェルス製柱状片刃石斧転用の砥石で全面を使用。100は粗粒砂岩製叩石兼用砥石で全面を砥面に使用。上下面を叩きに使用。前期後半。



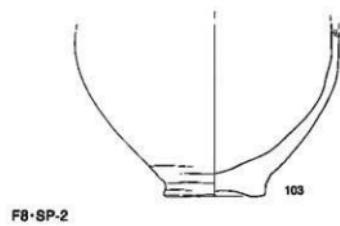
Ph.16 SK42(南東から)



Ph.17 SE54(左)・SK53(右)・南東から)



B4-SP-1



0 10cm

Fig.19 SD04・SP出土遺物実測図 (1/3)

3. 弥生前期末～中期初頭の調査

同期の遺構は南半部を主に分布し、土壤5基・井戸1基・不整形土壤1基を検出、前期で時期細分できない土壤SK12・15・64はこの項に含める。遺構は前代の1/4以下と少ないが遺物の量は多い。

1) 土壌SK42 (Fig.21 Ph.16) F11グリッドに位置、SX39と擾乱に切られる。3.45+ α × 1.75+ α m・深さ12cm程で方形堅穴住居の可能性が高い。出土遺物 (Fig.22) 104は壺の口縁。105・106は三角口縁の壺。107は土製紡錘車。全面ナメで径3.3厚0.9cm・孔径4mm・12gを測る。中期初頭。

SK13 (50) (Fig.21) D7グリッドに位置、SD43・44に切られる。3.92×1.85m・深さ35cm程の溝状の土壤で底面に石皿を置く。出土遺物 (Fig.22) 111・112は段を持たない壺口縁で111は口縁内面が肥厚・口唇に凹線。113・114は壺で113は口縁下の突帯に小さな刻目。114は底部が肥厚。115・116は壺胴部片の土器片円盤で115は端部を擦り116は敲打で整形。22・24gを測る。117は粗粒砂岩製砥石転用凹石。118は花崗岩製の石皿で上下両面を使用し浅く窪む。前期末～中期初頭。

2) 井戸SE54 (Fig.21 Ph.17) E5グリッドに位置し、SK53を切る。径88・深さ87cm程で南の底面が5cm程下がる。出土遺物 (Fig.22) 108・109は壺で108は断面三角口縁の壺。109は口唇下端に刻目。110は壺胴部片の土器片円盤。敲打で整形。径4.2厚0.6cm・11gを測る。中期初頭。

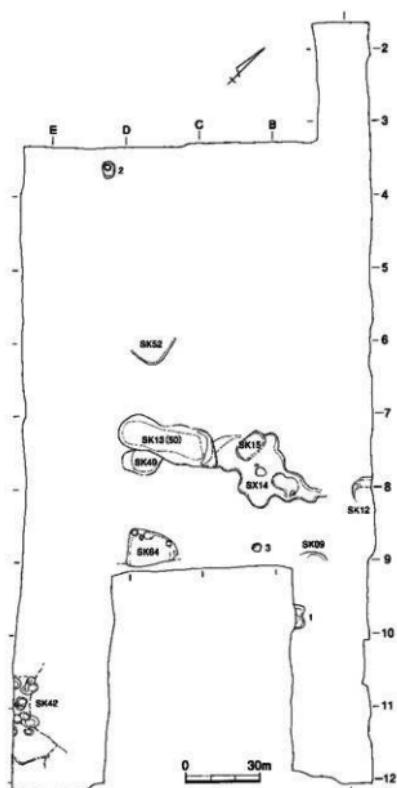


Fig.20 弥生前期末～中期初頭遺構分布図 (1/200)



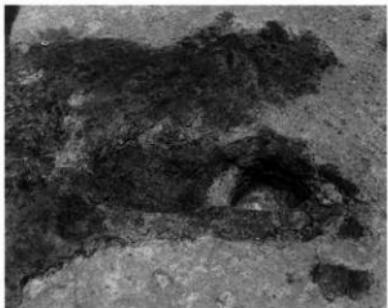
Ph.18 SC24(南から)



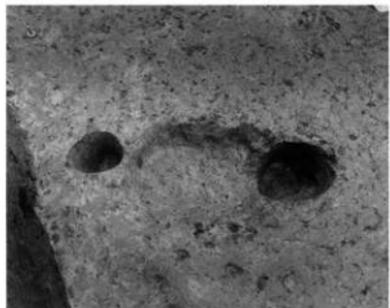
Ph.19 SC24 土層断面(北から)

3).不整形土壌SX14 (Fig.21) C7に位置。5.25+ α ×3.5m・深さ8cm程の自然の流路。出土遺物 (Fig.22) 119は壺の口縁。120は玄武岩石斧軒用叩石。121は黒耀石刀潰し加工の削器。前期末。

4).柱穴出土遺物 (Fig.22) 122は壺で無段の貝殻羽状文。123は西瀬戸系の壺で沈線間に列点文。125は頁岩質砂岩製石剣中茎。126は粗粒砂岩製孔低石で径19mm。先端が段を成す。127は金海式壺棺の口縁部。128は土製紡錘車。径4.4厚1.4cm・孔径6mmで穿孔時の螺旋条痕が残る。31gを測る。



Ph.20 SC24 炭化材出土状況(南から)



Ph.21 SC24 炉(南東から)

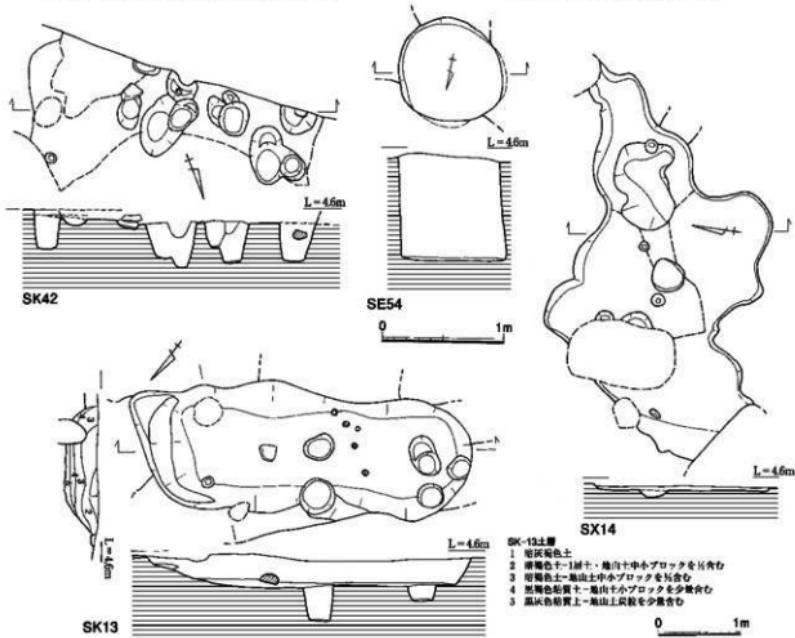


Fig.21 SK42・13・SX14 (1/60)・SE54 (1/40) 実測図

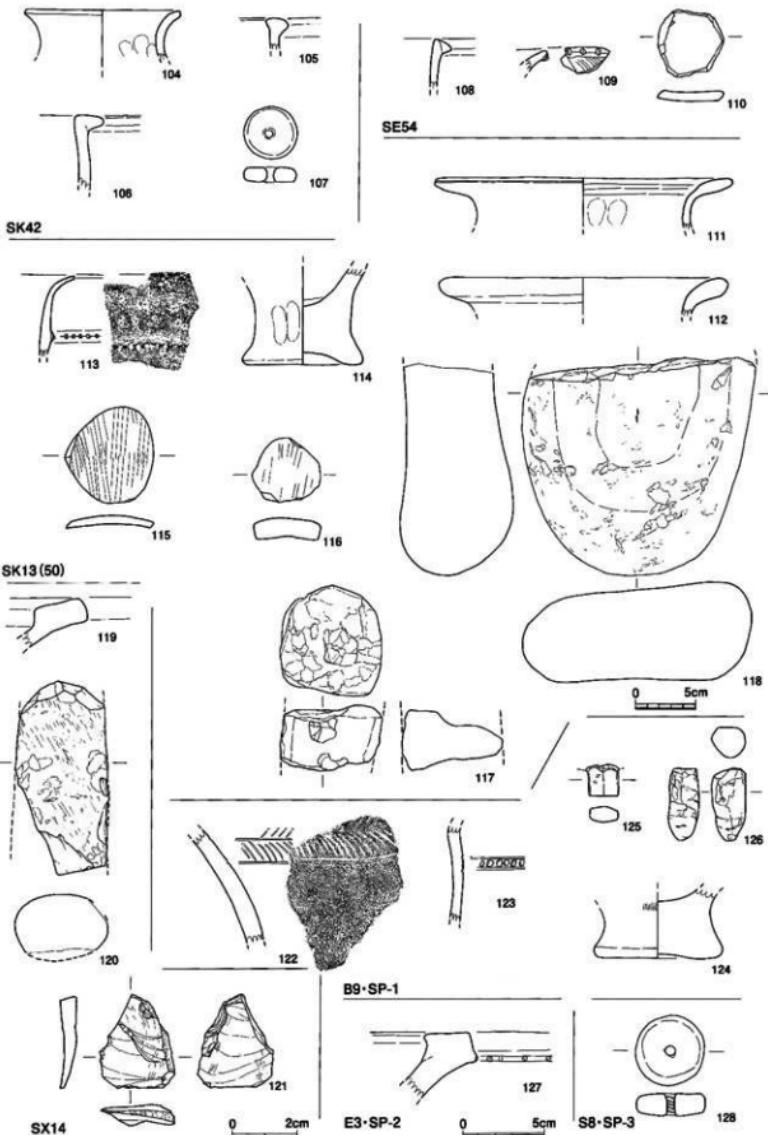
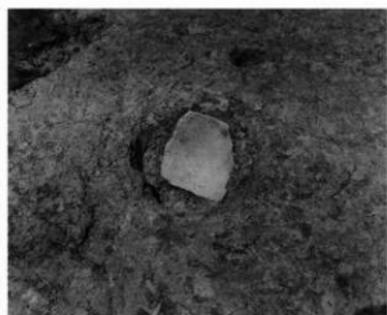


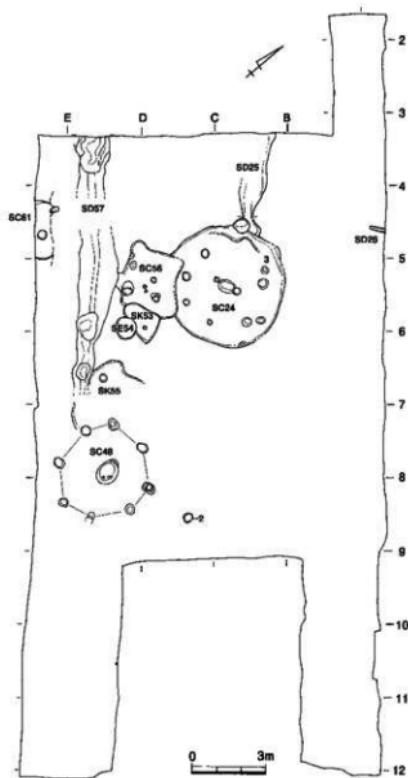
Fig.22 SK42・13・SX14・SE54・SP出土遺物実測図 (1/3・2/3・1/4)



Ph.22 SC24 柱穴内(南から)



Ph.23 SC48 炉(北西から)



Ph.24 SD57(南東から)



Ph.25 SC56(南西から)

Fig.23 弥生中期造構分布図 (1/200)

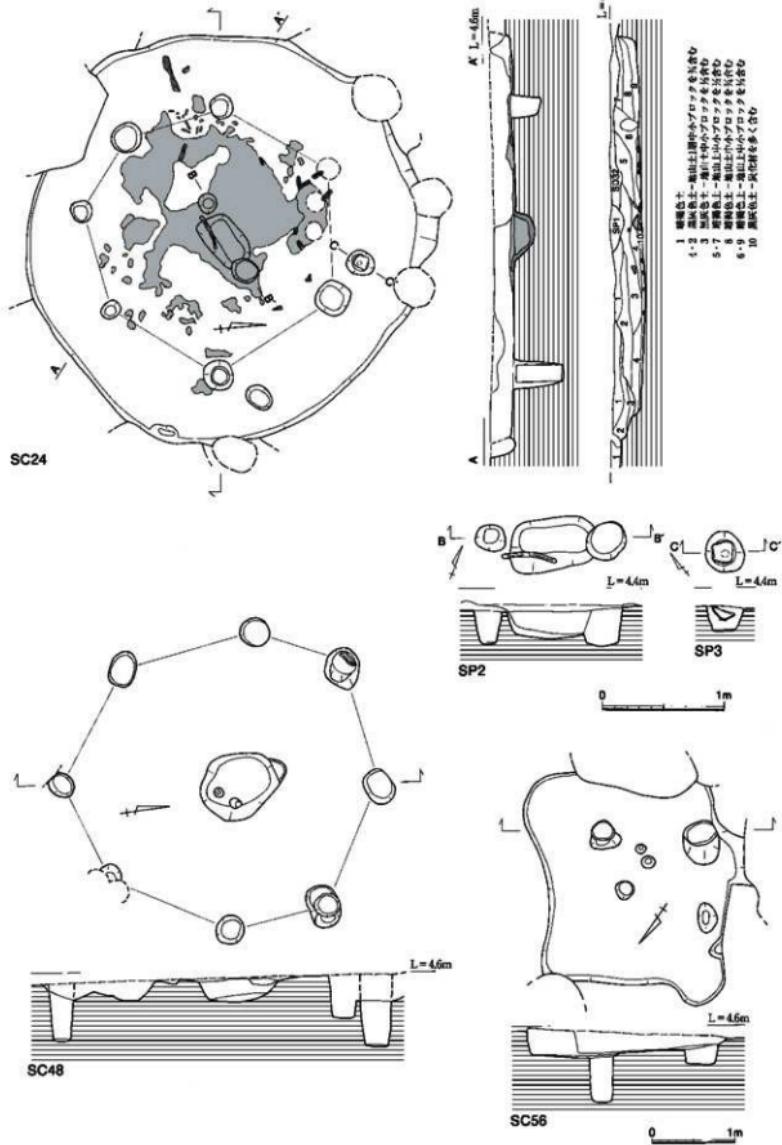
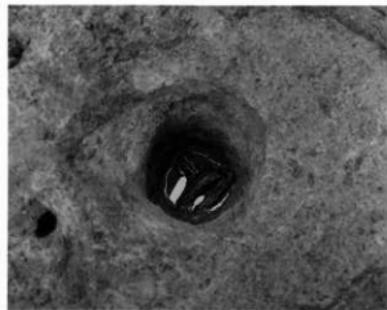


Fig.24 SC24・48・56実測図 (1/60・1/40)



Ph.26 D8SP2 柱穴がらみ(北西から)

4. 弥生時代中期の調査

同期の遺構は前代と逆に北半部を主に分布し、竪穴住居3棟・土壙2基・溝2条を検出、弥生時代で時期細分できないSC61・SD26はこの項に含める。遺構は前代同様少ない。

1)竪穴住居SC24 (Fig.24 Ph.18~22) C5グリッドに位置し、円形プランでSC56・SD25に切られる。4.75×4.96m・深さ25cm程で主柱穴は径20深さ40~65cm程。径3.3m程に7本程が柱間1.1~1.6m間隔で並ぶ。中央に70×43×22cmの炉穴を設け両端に25~30cmの小穴を設ける松菊里タイプで壁面は被熱しない。消失家屋で中央部に3.5m程炭化材が5cm前後覆い、

客土で埋められる。焼土は無く屋根・壁材に土を用いない。土層から北側に幅1m程ベッド状に貼床を行った可能性がある。柱穴1基には壺底部がはまる (Ph.22)。出土遺物 (Fig.25) 129がその土器で調整は不明。130は三角口縁の壺。131は夜白II式深鉢。132は縁泥片岩製の全磨製品。中期初頭~前半。

SC48 (Fig.24 Ph.23) E7グリッドに位置し、円形プランでSC51を切る。炉穴と柱穴のみ残存。径30~45深さ65~90cm程の柱穴で、径3.8m程に8本が柱間1.2~1.7m間隔で並ぶ。中央に95×80×30cmの炉穴を設け壁面は被熱しない。出土遺物 (Fig.25) 133は壺で口唇内が張り出す。134・135は壺で134は三角口縁。135は厚い底部だが端部は張り出さない。中期前半。

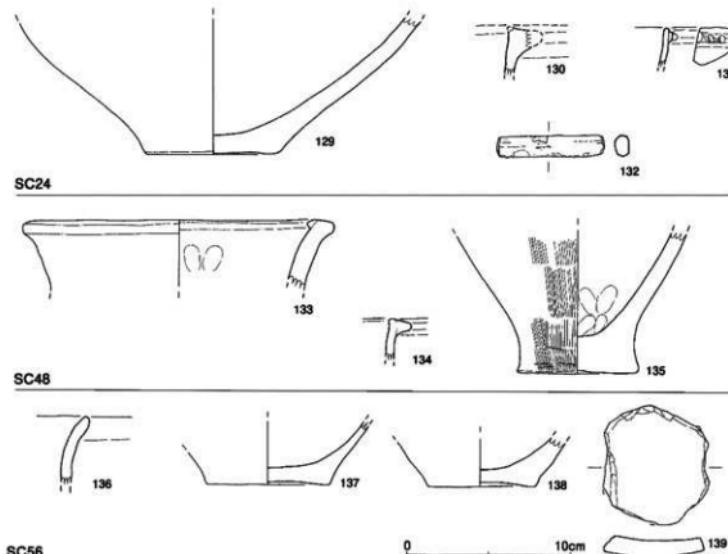


Fig.25 SC24・48・56出土遺物実測図 (1/3)

SC56 (Fig.24) D5グリッドに位置し、方形プランでSC24を切る。2.5×2.45m・深さ35cm程で2ヶ所60cm程半円形に突出する。炉・主柱穴は明確でない。出土遺物 (Fig.25) 136は壺口縁。137・138は壺でともに著しく被熱する。139は壺片の土器片円盤で敲打で整形。57g。中期後半。

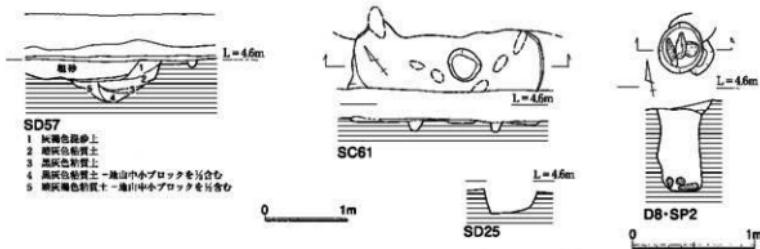


Fig.26 SD25・57・SC61・D8SP2実測図 (1/60・1/40)

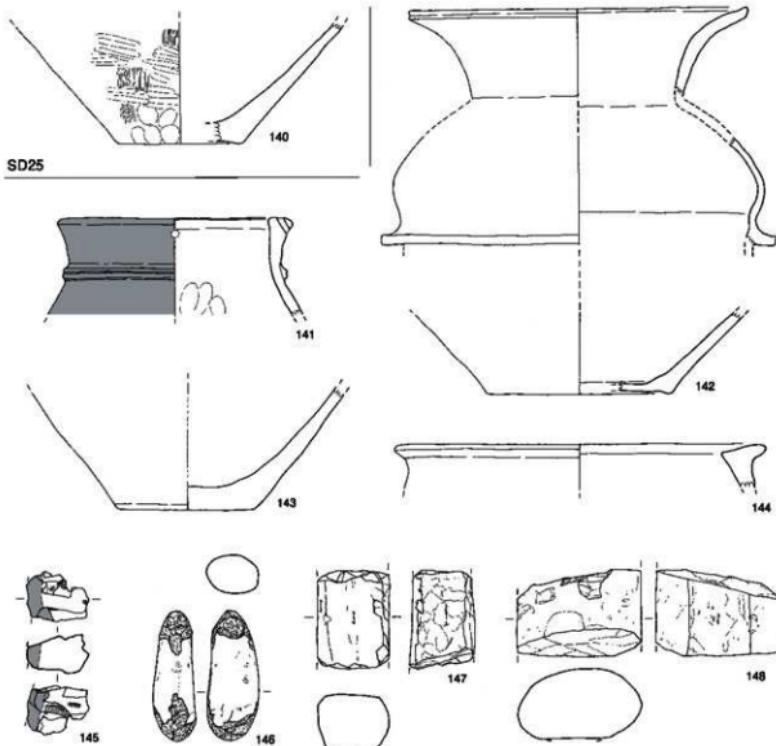


Fig.27 SD25・57出土遺物実測図 (1/3)

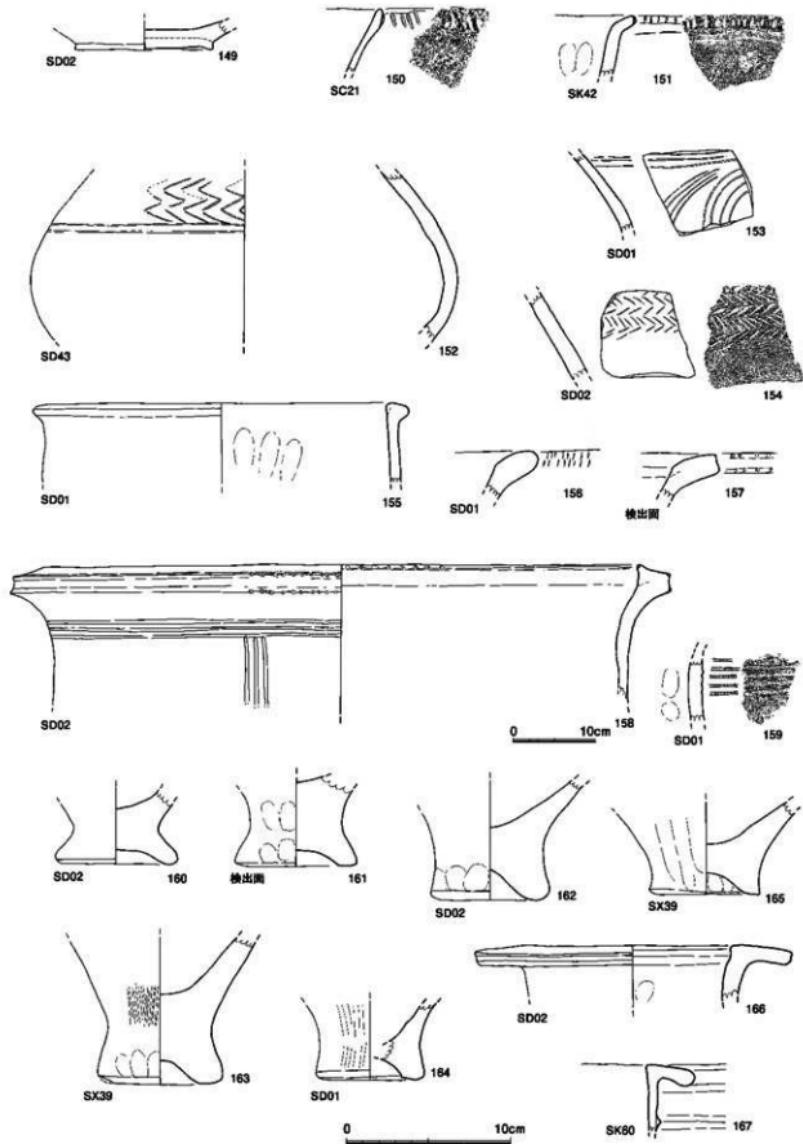


Fig.28 弥生時代出土遺物実測図. 1 (1/3)

2)溝 SD25 (Fig.26) C4グリッドに位置、SC24を切る。幅40深さ20cm程でSD57と平行する。出土遺物 (Fig.27) 140は壺底部で薄く若干上げ底。外面はタテハケ後ナデ・ケンマ。中期後半。

SD57 (Fig.26) SC48の北に位置しSD06に切られ、幅150深さ50cm程でN-47° - Wに流れる。土層断面から埋没後に再掘。出土遺物 (Fig.27) 141~143は壺。141は丹塗りの無頸壺。142は瓢形で丹塗りは不明。下半はタテハケ後ナデ・ケンマ。144は壺。145は炉壁片で粉殻・スサを含む多孔質の胎土で厚さ1cm程被熱で黒色に焙解。146は玢岩自然砾の石杵で赤色顔料が一部残存。147は粗粒砂岩製砥石転用叩石。2面を使用。148は玄武岩製石斧転用磨石で下面が窪む。中期後半。

3)柱穴 D8SP2 (Fig.26 Ph.19) 径30深さ65cmで底面に径5長さ25cm程の木材を3本組み柱の根がらみとする。柱は抜かれている。

5. その他の出土弥生遺物

Fig.28~30は後代の遺構や擾乱等の混入遺物。149は板付 II A式壺。150は夜白式粗形壺。151は板付 I

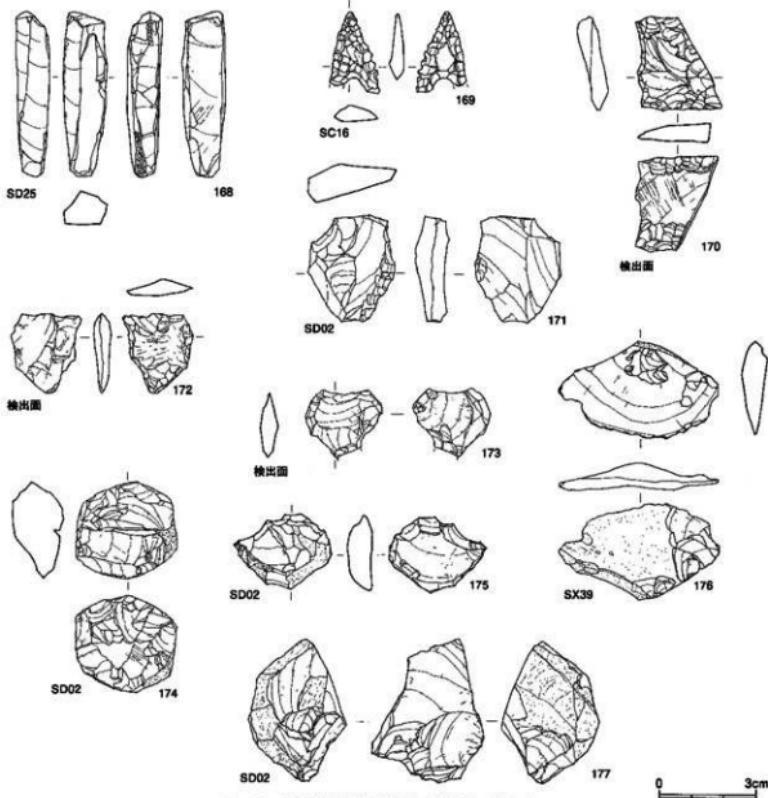


Fig.29 弥生時代出土遺物実測図. 2 (2/3)

式壺。152～154は前期後半有文壺、152・154は貝殻施文、153は豊前系か。153～163は前期末～中期初頭の壺、159はハケメ工具の押圧沈線5条・西瀬戸系。164～167は中期前半の壺・壺。168～177は黒耀石石器。168は石刃石核で5面で剥離・上下打面は磨り・旧石器。169は姫島黒耀石石鏃・左辺を鋸齒状に仕上げ0.98 g 繩文中期後半～後期。170は上下に両刃加工の削器。171は打瘤を除去した搔器。172・173は石錐、172は両側173は左辺刃潰し。174・175は楔形石器・上下が刃潰れ。176は使用痕剥片で下刃使用。177は石核・打面調整後正面で3右側で3枚剥離。178・179は石包丁、178は暗紫灰色凝灰質砂岩44 g、179は三角石包丁未製品黒灰色頁岩。180は玄武岩石鏃・上下刃に両刃加工・刃部が摩耗し打裂で使用。181は桂化木石鏃・上下刃に両刃加工で下刃は鋸齒状に仕上げ31 g。182～184は玄武岩両刃石器で、

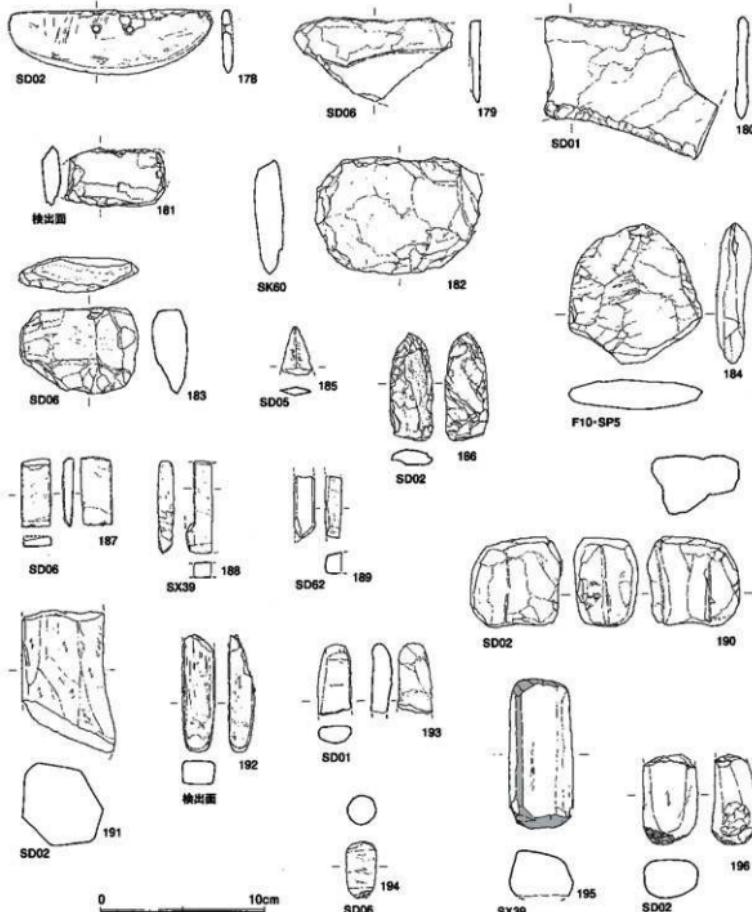


Fig.30 弥生時代出土遺物実測図. 3 (1/3)

182は上刃以外に両刃加工で刃部摩耗・229g、183は上面は自然面、下刃に両刃加工で刃部摩耗・118g、184は上刃打面以外に両刃加工で刃部摩耗・175g。185は凝灰質安山岩ホルンフェルス磨製石剣切先、2カ所刃こぼれ。186は暗灰色頁岩石鎌未製品。187～189は扁平片刃石斧、187・188は凝灰質安山岩ホルンフェルス、187は裏面を砥石に転用・88g、189は石英斑岩。190～194は砥石、190は粗粒砂岩製・表面・右側を使用他は敲打で砥面再生中、191は粗粒砂岩・8面使用で上下端欠損、192は細粒砂岩で表面・両側を使用・下端を叩き磨りに転用、193は粗粒砂岩手持ち砥石・表面のみ使用・段を成す、194は粗粒砂岩孔砥石で径18mm14g先端に叩痕。195は桂化木石杵・上下端面と側面後線部も使用181g。196は花崗岩砥石転用叩石・表裏2面を砥面・下端を叩き面使用。

6. 弥生終末～古墳前期の調査

同期の遺構は弥生前期に次いで多く、調査区のほぼ全面に展開し、13基の遺構中、10基を溝が占め、集落の居住関連の遺構は見あたらない。3基の土壙も溝内の埋みである可能性が高い。

1)溝 SD01 (Fig.32 Ph.27) 調査区東端に位置する幅5m深さ80cmの大溝でSD02を切る。東隣の4次調査区から北流し本調査区を挟んで北の115次調査区に連なる。粗砂と粘質土の互層で、中位の5層粗砂で半分以上が埋没し土器199が出土。8層中の木材集中は4次調査区梁状遺構の一部か。土層観察で10～

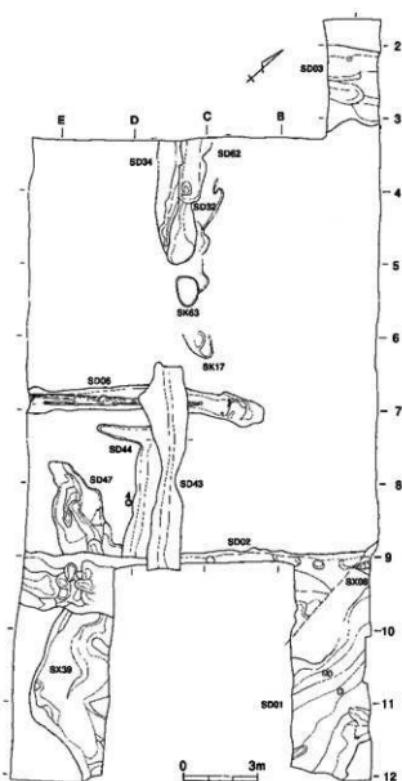


Fig.31 弥生終末～古墳前期遺構分布図 (1/200)



Ph.27 SD01(北から)



Ph.28 SD02(北東から)

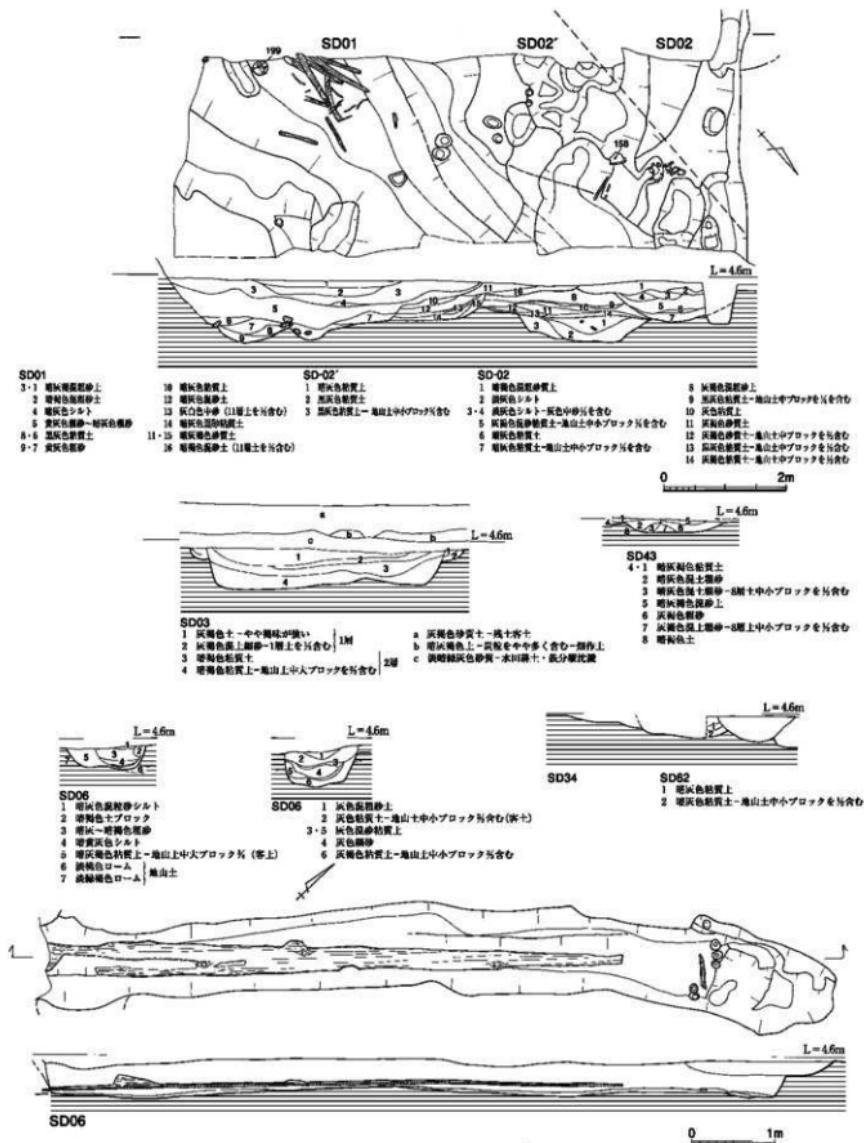


Fig.32 SD01・02・03・06・34・43・62実測図 (1/60・1/80)

15層の堆積を切って一度改削が確認される。出土遺物 (Fig.33) は土師器で197~199は近畿系壺。197・198は内面頸部下2.5cmからケズリ。197は外面に波状文。199はほぼ完形・口径16.6器高25.1cm・下半に煤付着。201は在地系壺口縁。202はミニチュアで全面ナデ。前期前半。

SD02 (Fig.32 Ph.28) 調査区南部を北東に流れSD01に切られる。幅4m深さ50cm程を測り、南の26次調査区には無く北の115次調査区でSD01と一体化。8~14層で大半が埋没後幅2.5m程に縮小し改削。粗砂の堆積は無い。出土遺物 (Fig.33) 203・204は近畿系二重口縁壺で橙色。205は山陰系二重口縁壺・鈍い黄橙色。210は近畿系の小壺・鈍い黄橙色。211も近畿系の二重口縁壺か外面に紐圧痕の沈線・突帯に串による刺突・橙色。212は五様式系壺・外底に木葉圧痕・橙色。213は滑石製筋鉢未製品・復元径5cm。



Ph.29 SD03(北西から)



Ph.30 SD43(右)・44(左・南東から)

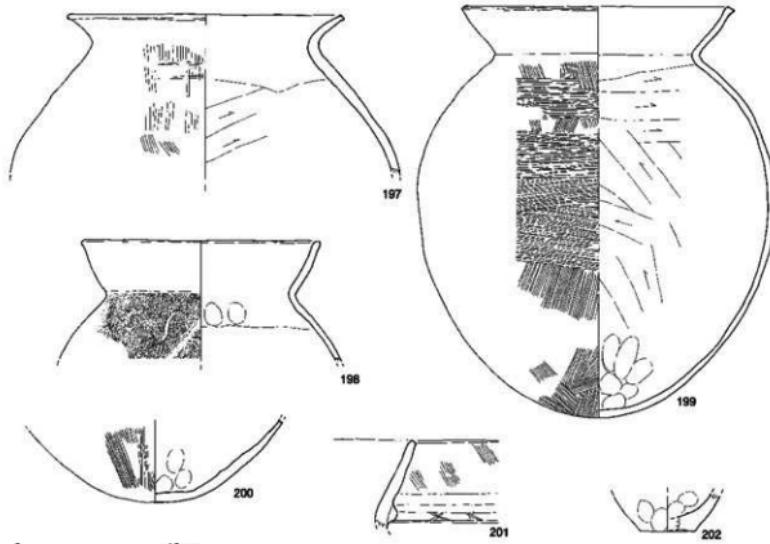


Fig.33 SD01出土遺物実測図 (1/3)

215は五様式系壺・口径19.0cm器高28.2cm・口唇は凹線気味・外面粗い平行叩き後タテハケ一部ケズリ・外底に薙圧痕・内面はナデ部分のハケ・ケズリ・橙色。204・208・210は下層出土。前期前葉か。

SD03 (Fig.32 Ph.29) 調査区北部をSD02に平行して流れる。幅4.8m深さ85cm程を測り、北の115次調査区では検出されない。中位に薄い粗砂層を挟む。出土遺物 (Fig.35) 217は近畿系壺・浅黄橙色。218は山陰系二重口縁壺・黒褐色。219は在地系壺・内外面ハケメ。弥生終末～古墳前期前半。

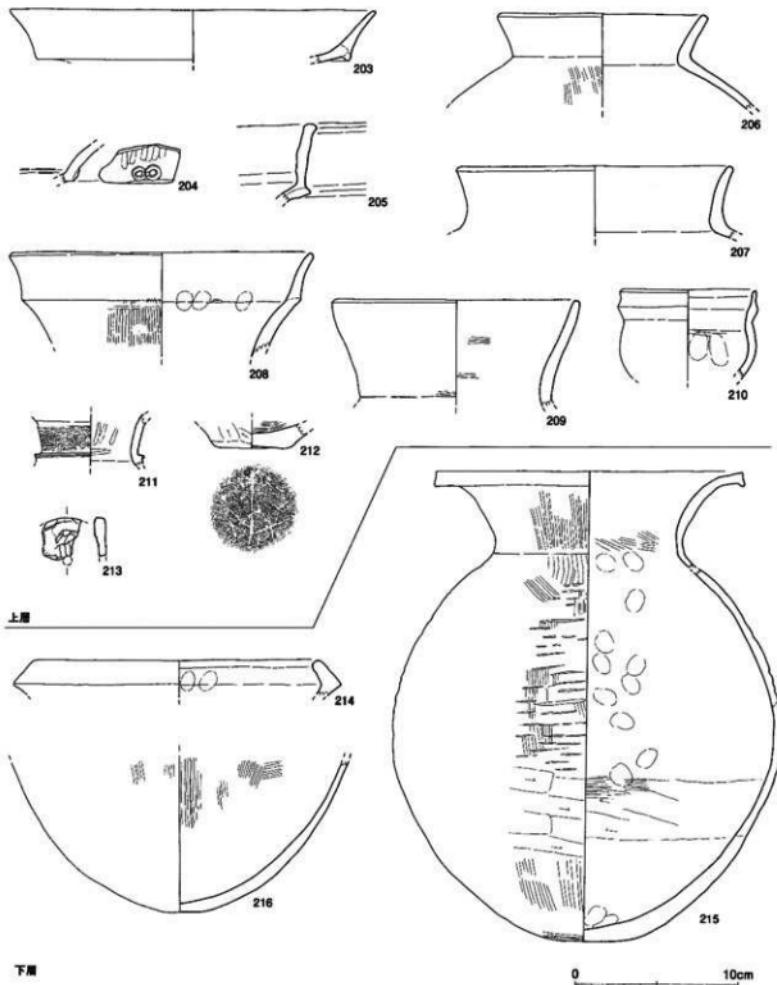


Fig.34 SD02出土遺物実測図 (1/3)

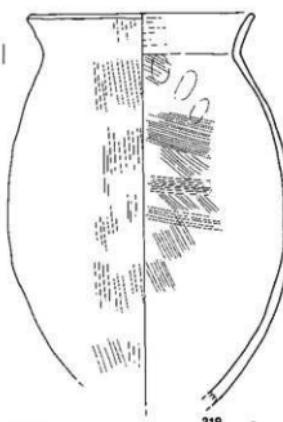
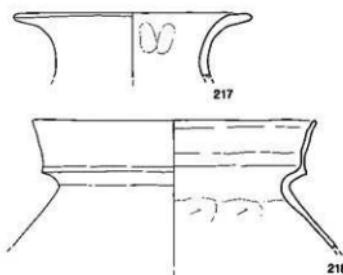
SD06 (Fig.32 卷頭2・3) 調査区中位でSD02に平行して流れる。幅95深さ40cm程の掘方に径60cm程の針葉樹を半裁し削り抜いた木樋を設置するが腐朽し底面部の幅10~40厚2cm程が残存するのみ。樹皮は無



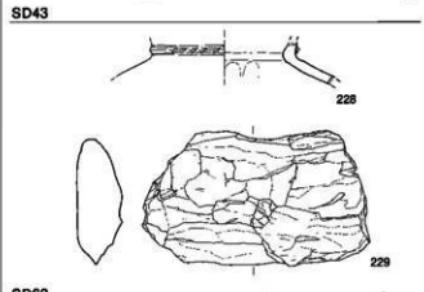
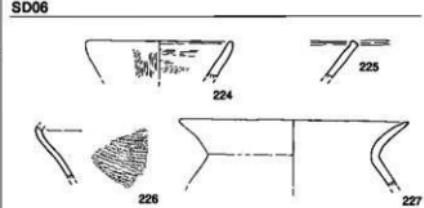
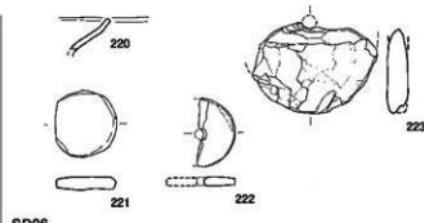
Ph.31 SD62(南東から)



Ph.32 SX39(南東から)



SD03



0 10cm

Fig.35 SD03・06・43・62出土遺物実測図 (1/3・1/4)

い。1.4%の勾配で南西に下がり20cm前後砂・シルトが堆積し後客土で埋められる。南の26次調査区では検出されない。出土遺物は少ない。(Fig.33) 220は近畿系壺・浅黄橙色。221は土器片円盤・敲打後擦りで整形・14g。222は結晶片岩紡錘車。223は滑石石錘未製品。古墳前期前半。

SD32・34・62・SD43・44 (Fig.32 Ph.31) 調査区を縱方向にSD02・06を切って直交方向に流れる溝群で、間を4m程開けて対面。西でSD62が32・34を、東でSD43が44を切り、34と44・43と62がそれぞれ対応。いずれも幅1~1.5m深さ15~30cm弱の深い溝。切り合ひと位置からSD01から分流する可能性があり、SD43に粗砂が及んでいる。出土遺物は少ない。(Fig.33) 244~227はSD43出土。225・226・227は近畿系壺・鈍い橙色・褐灰色・橙色。228は終末期壺・229は滑石素材。SD62出土。いずれも前期前半。

2)溜井状造構SX39・SD47 (Fig.36 Ph.32・33) 調査区南端に位置しSD02に切られる。大半が調査

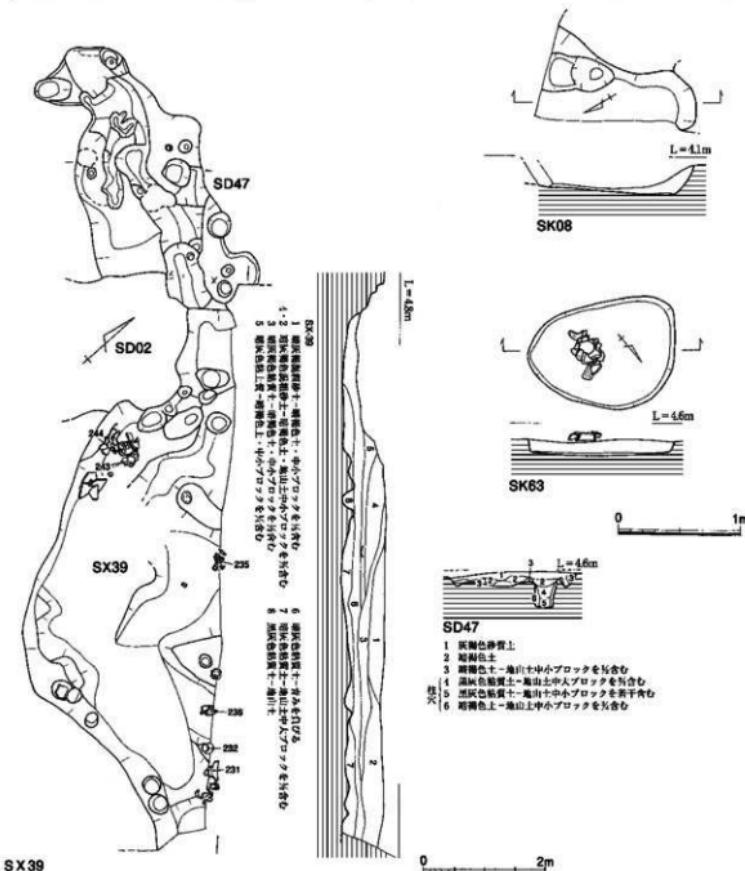


Fig.36 SD47・SX39 (1/80)・SK08・63 (1/40) 実測図

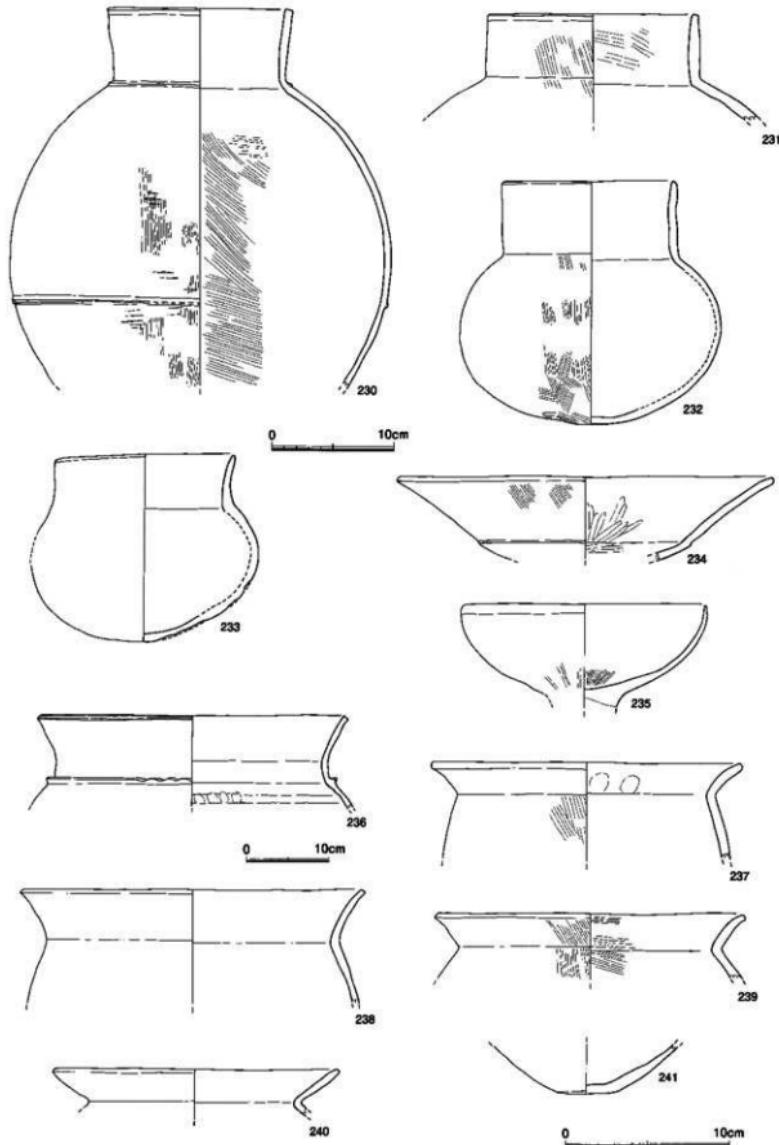


Fig.37 SX39上層出土遺物実測図 (1/3・1/6・1/4)

区外に広がり現況で $7.3 + \alpha \times 3.2 + \alpha$ m深さ70cmを測り西からSD47が流路として接続する。粗砂は無く下半に疊んだ状態で粘質土が堆積。遺物の大半はこの上面に堆積し地山土混じりの砂質土を客土(上層)。出土遺物(Fig.37・38) 230~241は上層出土。230~239は在地系。230・231は直口壺。230は外面ヨコタクキ後タテハケ・内面ナナメハケ・ともに鈍い橙色。232・233は壺で内面ナデ・鈍い橙色・黄橙色。234・235は高壺・内面ケンマ・鈍い橙色・黄橙色。236~239は壺。239は突帯にナナメ刻目。237は外面炭化物付着。240は近畿系壺・鈍い橙色。241は径3.6cmのレンズ底。242~245は下層出土。在地系で242は二重口縁壺・口径18cm。243・244は法面で破碎して出土。243は壺。内面ナデ。244は大壺で口径49器高66cm。内外ハケメ・底部レンズ底。245は滑石製有溝石錘・151g。弥生終末期。

3).土壤SK08・63 (Fig.36) SK08はA9グリッドに位置、SD02下面で $1.28 + \alpha \times 1.75 + m$ ・深さ23cm程。溝底面の窪みの可能性が高い。出土遺物(Fig.38) 247は近畿系壺脛部。頸部にハケ工具の押し引き

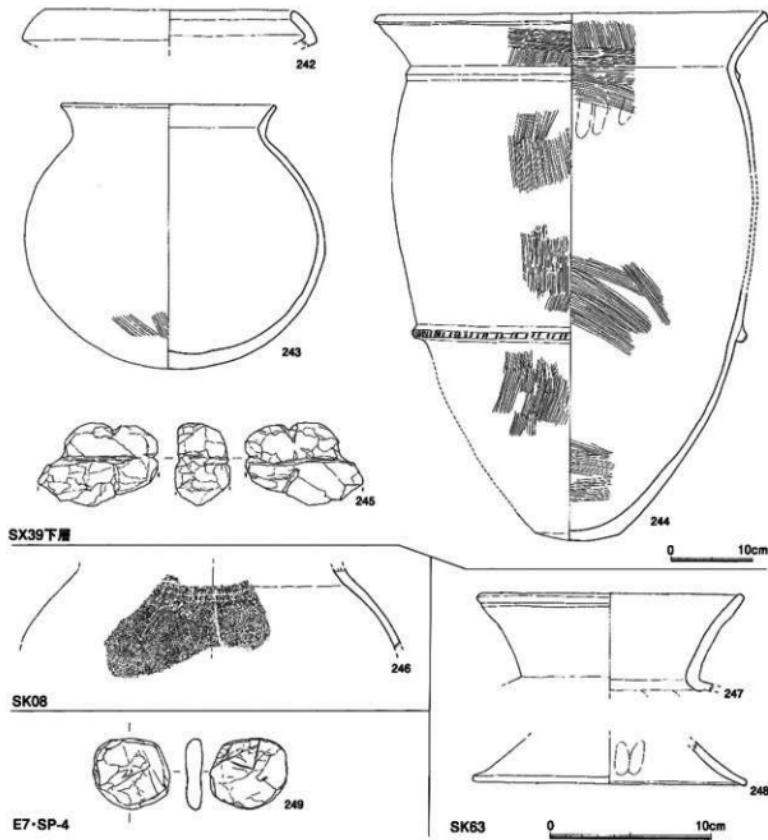


Fig.38 SX39・SK08・63出土遺物実測図 (1/3・1/6)



Ph.33 SX39 土器出土状況(北東から)



Ph.34 SK63(北西から)

文・下に波状文・鈍い黄橙色。前期前半。SK63(Ph.34)はSD32延長上のD5グリッドに位置。SC24を切る。

1.2×0.95m・深さ13cm程。出土遺物 (Fig38) 247
は土師器壺口縁で口径16.6cm・口縁下に沈線・内
面頸部下はケズリ・浅黄橙色。248は高坏脚・橙
色。前期末か。

249はE7・SP4出土滑石製紡錘車未製品。表裏
に十字様の数条の浅い線刻がある。36g。

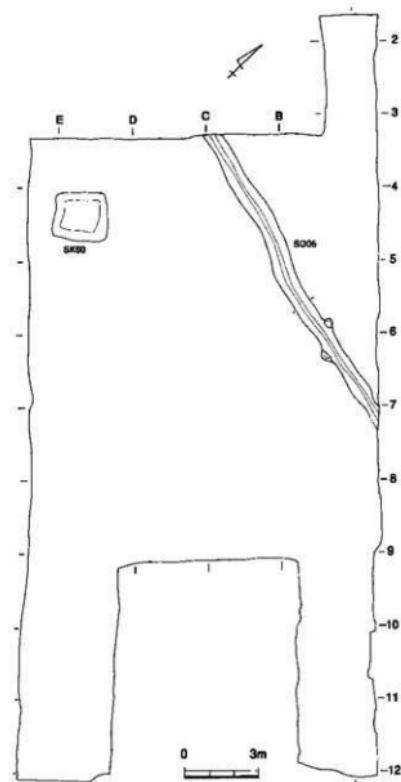
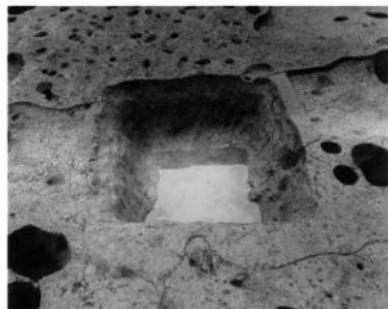


Fig.39 中世遺構分布図 (1/200)



Ph.35 SK60(北西から)

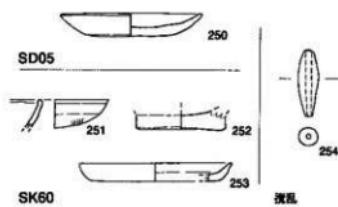


Fig.40 SD05・SK60他出土遺物実測図 (1/3)

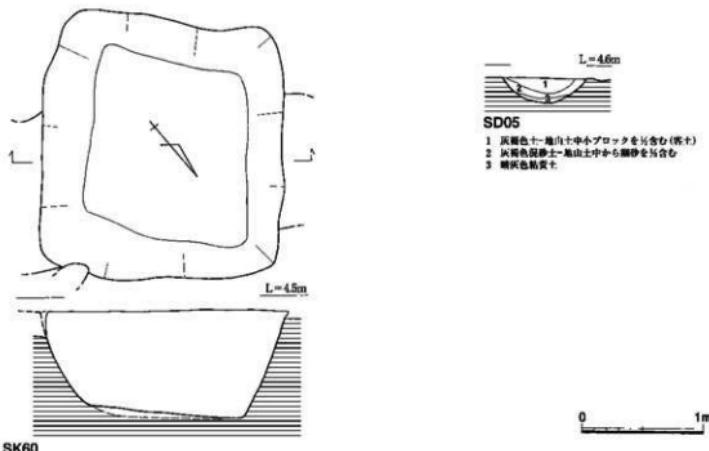


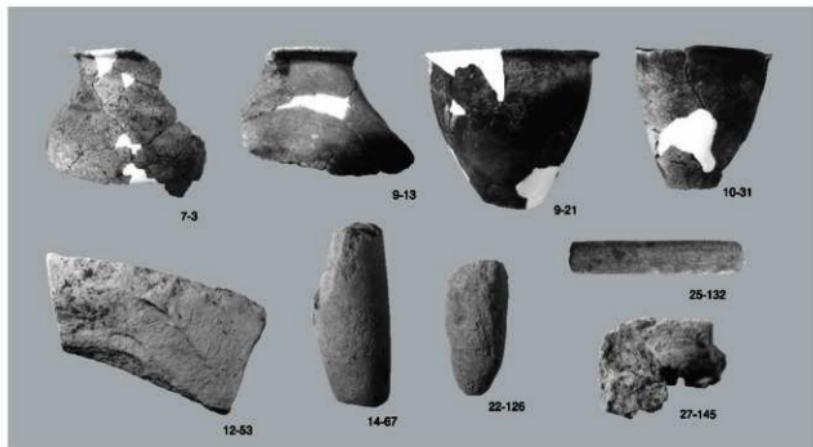
Fig.41 SK60・SD05実測図 (1/40)

7. 中世の調査

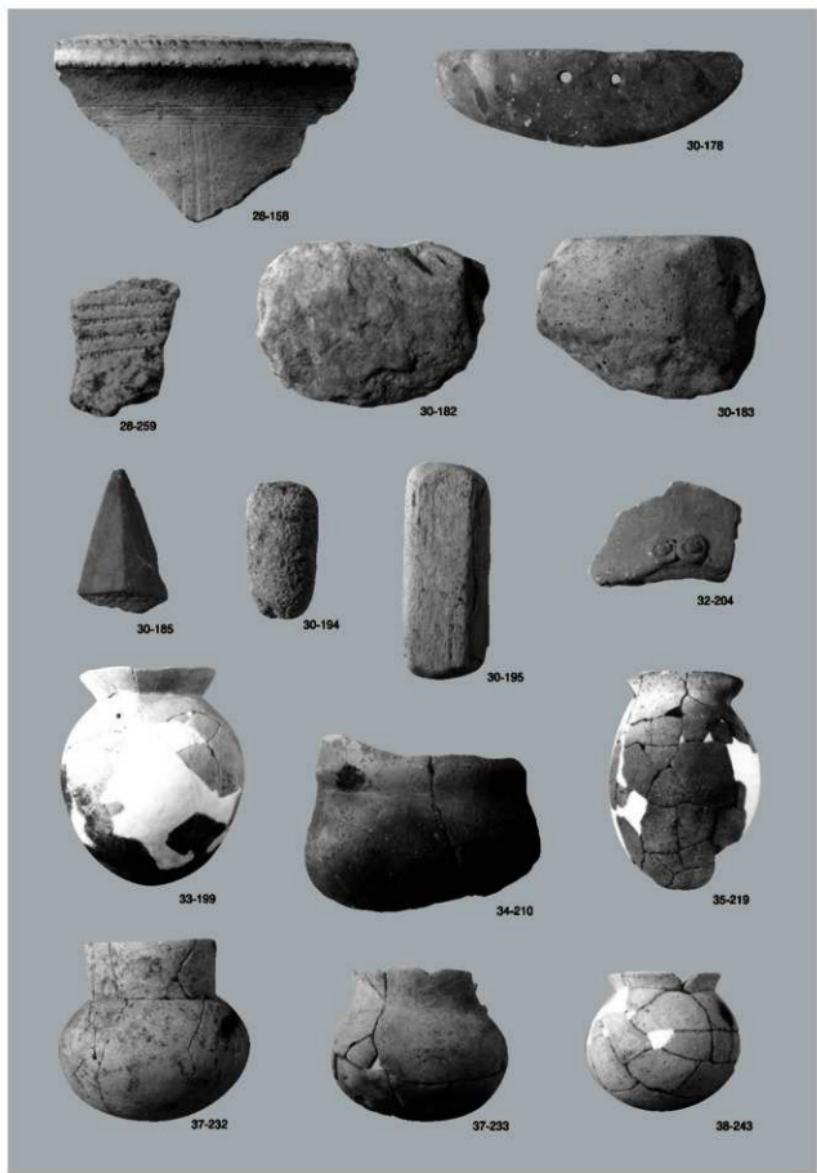
同期の遺構は土壙SK60と溝SD05の2基が西部に分布するのみである。

1)溝SD05 (Fig.41) 東西に流れる幅70深さ20cm程の溝で中位に砂混じりの灰褐色土が堆積。出土遺物 (Fig.40) 250は丸底土師器皿で口径8.4器高1.4cm。11世紀後半～12世紀前半。

2)土壙SK60 (Fig.41 Ph.35) E4に位置。2.12×1.95m深87cmの土壙で暗灰色粘質土上に地山土混じりの灰褐色砂質土で埋める。 (Fig.40) 251は同安窯系碗。252・253は土師器塊・皿。12世紀後半。



Ph.36 出土遺物. 1



Ph.37 出土遺物. 2

IV. 小結

調査の結果、弥生時代前期の竪穴住居5棟・貯蔵穴6基・土壙13基・溝2条、前期末～中期初頭の土壙5基・井戸1基・不整形土壙1基、中期の竪穴住居3棟・土壙2基・溝2条、前期～中期の竪穴住居1棟・土壙3基・溝1条、弥生終末～古墳時代前期前半の溝10条・土壙3基、中世の土壙1基・溝1条を検出した。遺物は、各遺構から旧石器・弥生土器・石器・土師器・須恵器・貿易陶磁器などコンテナ20箱分検出している。

旧石器時代は遺物として石刃石核168を検出している。

縄文晩期夜臼式土器の検出は数点のみで後代の遺構混入資料として採集し、遺構は伴なわない。集落の体を成すのは板付I式期からで、中央部に竪穴住居SC07・土壙SK10・18の3基が分布する。拡充するのは前期後半期に至ってからで、竪穴住居SC16・20・22・51・貯蔵穴SU19・21・23・28・37・40・土壙SK27・29・30・31・35・36・41・45・46・58・59の24基が一見、幅10m程の南北方向のベルト状に集中し、全遺構の4割近くを占める。住居は小型の方形プランが主となるが、主柱穴・炉穴等内部施設が明確でない。円形は松菊里タイプのSC51の1基のみで、これは明確な炉穴を持ち柱穴は円形に巡る。貯蔵穴も長方形プランのみでSU21・23は底面に小穴を持つ。1m前後の深さを有するものを貯蔵穴としたが、炭化米を検出したのは土壙とした浅いSK27・35・36と柱穴B3SP4と、貯蔵穴以外からの検出である。SU19からは獸骨が少量出土している。また住居と貯蔵穴は混在し有機的な関連は見いだせない。遺物としては瓶と重張文等を施した有文壺・打製整形した飛碟68・84の出土が目立つ。飛碟は全面打製で球形に整形する丁寧なものから略直方体に整形する粗雑なものまであるが、前期で13点・全体で57点出土し、周辺からも石劍・石鎌・木鎌等武器の出土が目立ち、当時の政情不安な状況を示す資料の一つである。前期末～中期初頭の遺構は南半部を主に分布し、土壙SK09・13(50)・42・49・52・不整形土壙SX14の6基のみで、遺構は全体の1割と前代の1/4程で少ないが遺物の量は目立つ。南端部の大型土壙SK42は規模と方形の壁面を一部残すことから竪穴住居の可能性も考えられる。遺物としては123・159の西部瀬戸戸方式系の壺の出土が注目される。また、SK42からは子芋状の炭化物が出土した。中期の遺構は前代と逆に北半部を主に分布し、前半の竪穴住居SC24・48SK53、後半のSC56・SK55・溝SD25・57の7基がある。SC24は松菊里タイプの消失家屋で炭化材が炉穴・柱穴を覆っている。主柱穴は炉穴を中心に円形に巡り、これはSC48も同様である。松菊里タイプの住居としては時期が新しい嫌いがあるが柱穴内から前半期の壺底部129がはまった状態で検出されている。後半のSD57からは141・142の丹塗り無頸壺・瓢形壺・146赤色顔料石杵と祭祀色の強い遺物が出土し、145の鋳造関連の炉壁の出土も注目される。他弥生時代の遺物としては53・180の打製石鎌があり、刃部は摩耗し打製のまま使用される。182～184の横長の両刃石器も目立つ資料で玄武岩扁平礫の上辺以外に刃部を整形しこれが使用で刃先に平坦面を作るほど摩耗し、使用状態・重量から穗摘具とは考えがたい。手鍼状の小耕作具と考えられる。181・195の桂化木を用いた石器も特徴的である。

弥生終末～古墳前期の遺構は弥生前期に次いで多く、調査区のほぼ全面に展開し、13基の遺構中、10基を溝SD01・02・03・06・32・34・43・44・47(39)・62・が占め、集落の居住関連の遺構は見あたらぬ。時期的には弥生終末期に溜池状遺構SX39が掘削され、前期前葉に平行するSD02・03・06が掘削、最後に大溝SD01や、SD02等と直交方向にSD32・34・62と43・44が掘削されたと考えられる。SD06には径60cmの針葉樹の半裁樹幹を削り抜いた木撃が据えられる。

Tab.1 造構一覧

土器番号	グリッド	時 期	規 模		平面形	主な出土遺物	備 考	写真番号	測量番号
			幅×奥×深さ(m)	幅					
SC07	C8	弥生初期後半	2.85×1.5+e×0.15	長方形	海生土器(縁)・ob(縁)			5	
SC16	C6	集落初期後半-末	2.9×2.25×0.15	長方形	海生土器(縁・底)・ob(削端・底・u・f)・チャート(f)・上裏片門壁	f・SK18を切る	2・3	5	
SC20	B6	弥生前中期後半	2.6×2.0+e×0.25	長方形	海生土器(縁・底)・石器(石斧・鐵鏟)・ob(石核・f)・土器片門壁	SC22・SU21を切る	4・5	5	
SC22	A5	佛生前中期後半?	3.5+e×2.15+e×0.20	長方形	海生土器(縁)・石器(甲冑)・ob(石核・f)		4	5	
SC24	C5	弥生中期後半-盛期	4.75×4.95×0.25	円形	海生土器(縁・底)・石器(全削製石器・叩石・飛鏢)・ob(石核f)・土器・火薙	16・18・32を切る・板 着火盤・消失火窓	18-22	34	
SC48	E7	弥生中期後半		円形?	海生土器(縁・底)・石器(石核・飛鏢)	SC51を切る	5	4・5	
SC51	E7	弥生前中期後半		円形	海生土器(縁)・石器(磨製石器・草木器)・ob(縁・f)・玄武(f)	切痕		24	
SC56	D5	弥生中期後半	2.5×2.45×0.35	方形容	海生土器(縁・底)・石器(飛鏢)・ob(f)・土器片門壁・土器器	24・52を切る			
SC61	F4	弥生前中期	2.35×0.72+e×0.03	長方形	海生土器(縁・底)・石器(右斜)・ob(底・f)・チャート(f)・土器片門壁				
野藏穴番号	グリッド	時 期	規 模		平面形	主な出土遺物	備 考	写真番号	測量番号
			幅×奥×深さ(m)	幅					
SU19	B6	前期後半	2.10×1.63×0.73	圓角長方形	海生土器(縁・底)・石器(石核・石笛・鐵鏟)・石器(石削・石笛丁・磨製石斧・扁平打製石器・叩石・叩石・飛鏢)・ob(縫・f)・土器片門壁	SC20を切る	4・5	8	
SU21	A5	中期後半	1.69×1.00×0.95	圓え方形	海生土器(縁・底)・石器(飛鏢)・ob(f)・土器器	底部に円穴	6・7	8	
SU23	B5	中期後半	1.64×1.40×0.98	圓え方形容	海生土器(縁・底)・右器(磨製石斧・叩f)・ob(石核・f)・右英(石核)	底部に円穴・SC20を切る	8	8	
SU28	B4	前期前半	2.53×1.63×0.60	圓え方形容	海生土器(縁・底)・ob(4核・u・f)・化成木		9・10	8	
SU37	B2	前期後半?	2.35×1.07+e×0.95	圓え方形容	海生土器(縁・底)・石器(磨製石斧・叩石)・ob(f)		11	13	
SU40	E10	前期前半	2.15×1.52×1.00	圓え方形容	海生土器(縁・底・飛鏢)・石器(石核)・石夷(石核)・土器片門壁・骨器・土・土器器		12	13	
土器番号	グリッド	時 期	規 模		平面形	主な出土遺物	備 考	写真番号	測量番号
			幅×奥×深さ(m)	幅					
SK08	A9	古墳前期後半	1.28+e×1.75×0.23	廣状	土器部(底・縁)・其化成板子・海生土器・ob			36	
SK09	B8	弥生前中期	0.87+e×0.25+e×0.3	圓形	海生土器				
SK10	B8	弥生前中期	1.12+e×0.82×0.15	橢円形	海生土器(縁)・ob(f)			15	
SK12	A8	弥生前中期	0.84+e×1.0+e×0.24	圓形?	海生土器(縁)				
SK13-50	D7	弥生前中期-中	3.92×1.85×0.35	廣状	海生土器(縁・底)・石器(石核・西石・敲石)・ob(石核・u・f・f)・土器片門壁	SK14を切る		21	
SK14	B7	弥生前中期	1.25+e×1.75×0.23	圓角長方形	海生土器(縁・底)・ob(uff)				
SK15	C7	弥生前中期	1.35×0.8×0.33	圓角長方形	海生土器・ob(uff)	SK11を切る			
SK17	D6	大内前中期	1.4+e×0.8×0.3	不規則	海生土器・ob・透上丸	SK24を切る・SK25の延長か			
SK18	C6	弥生前中期前半	1.24+e×0.85+e×0.07	方形容	海生土器(縁・底)・石器(扁平打製石斧)・ob(uff・f)	透穴住居か		15	
SK27	B4	弥生前中期後半	1.75+e×1.25+e×0.1	方形容	海生土器(縁・底)・ob(f)・丸上丸・化成木				
SK29	B1	弥生前中期後半	1.30+e×1.03+e×0.07	方形容	海生土器(縁・底)・ob(u・f)	透穴住居か・SK38を切る		15	
SK30	B3	弥生前中期後半	1.40×1.35×0.26	方形容	海生土器(縁・底)		14	15	
SK31	B3	弥生前中期後半	1.58×0.8×0.18	圓角長方形	海生土器(縁・底)・右器(石核・底石・飛鏢)・ob(f)	土器部裏面・SK30を切る		15	
SK35	C3	弥生前中期後半	2.65+e×1.73×0.18	長方形	海生土器(縁・底)・ob(底・f)・化成木			15	
SK36	C3	弥生前中期後半	0.98×0.80×0.48	圓孔方形容	海生土器(縁)・ob(f)・丸上丸・化成木	SK35を切る		15	
SK41	E11	弥生前中期後半	1.39×1.15×0.09	圓孔方形容	海生土器(縁)・ob(f・縁)				
SK42	F11	弥生中期初期	3.45+e×1.75+e×0.12	方形容?	海生土器(縁・底)・石器(飛鏢)・ob(石核・f)・土裏筋鉢本・子芋	透穴住居か		16	21
SK45	D8	弥生前中期後半	1.8×0.4+e×0.1	不規形	海生土器(縁・底)				
SK46	D7	弥生前中期後半	1.88+e×1.16+e×0.05	小菱形	海生土器(底・縁)・底白(底盤)・十瓣器			15	
SK49	E7	弥生中期-中期後半	1.75×1.3+e×0.16	橢円形	海生土器(縁)				
SK52	D5	弥生前中期	1.6+e×1.25+e×0.23	方形容	海生土器(縁)・石器(飛鏢)・ob(f)	透穴住居か			
SK53	E5	弥生中期初期	1.57×1.3×0.34	不規形	海生土器(縁)・ob(f)	SE・56を切る			
SK55	E6	弥生中期初期後半	1.0+e×2.12×0.07	不規形	海生土器				
SK58	E6	弥生前中期後半	1.86×0.77+e×0.16	方形容	海生土器(縁・底)・ob(f)・化成木・貝	透穴住居か・SK39を切る		13	15
SK59	E5	弥生前中期後半	0.2+e×1.1+e×0.75	円形?	海生土器(縁)・社化木				
SK60	E4	十二世紀後半	2.12×1.95×0.87	方形容	白磁・青磁(同安窯系器)・土裏筋鉢(ー・底・縁)・瓦・須恵器・海生土器・鏡井			35	41
SK63	D5	古墳前期末	1.2×0.95×0.13	不規形	海生土器(縁)・石器(磨製石斧)・ob(f)・燒土塊	SC24を切る		34	36
SK64	D6	弥生前中期	2.04×1.5×0.21	円形?	海生土器(縁)・石器(磨製石斧)・ob(f)・燒土塊				

Tab.2 遺構一覧

不整 形 上端番号	グリッド	時 期	風 機	平面形 幅×奥行き(m)	主な出 土 蓋 物	備 考	写真 番号	測量 番号
			風機 幅×奥行き(m)					
SX14	C7	弥生前期末～中 期初期	5.25+e×3.50×0.08	不整形	海生土器(甕・壺)・石器(手石)・ob(削器・石核・f1)	SDIIを切る		21
升戸 番号	グリッド	時 期	規 格 幅×奥行き(m)	平 面 形	主 な 出 土 蓋 物	備 考	写真 番号	測量 番号
SE54	E5	弥生中期初期	0.9×0.88×0.87	円形	海生土器(甕)・臼臼(深鉢・浅鉢)・ob(f1)・土器片凹盤・焼上輪	SK53を切る	17	21
溝番号	グリッド	時 期	規 格 幅×奥行き(m)	平 面 形	主 な 出 土 蓋 物	備 考	写真 番号	測量 番号
SD01	A9～B11	古墳前期後半	5.0×0.8		土器器(甕・壺・高环・ミニチュア)・土器片凹盤・燒土塊・海生土器・石器	SD02を切る	27	32
SD02	A9～F9	古墳前期後半	4.0×0.5		上:海器(甕・壺・高环)・石器(風石・鋸舞斧)・下:土器片凹盤・焼土塊	07・09・39・47・64 を切る	28	32
SD03	A3～B2	古墳前期後半	4.8×0.85		土器器(甕・壺)・土器片凹盤・焼土塊・海生土器・石器	04・37・38を切る	29	32
SD04	A3～B5	弥生中期後半	0.35×0.18		海生土器(甕・壺)・石器(砾石・叩石)・ob(豆)・焼化土	SK27を切る	15	6
SD05	A8～C3	古墳前期後半	0.7×0.2		上:海器(豆・环)・瓦器(环)・瓦器器・海生土器・石器	新分野の急登歩留地		41
SD06	C6～P6	古墳前期後半	0.95×0.4		土器器(甕・壺・高环)・木棒・石器(砾石・枯葉率)・土器片凹盤・海生土器・石器	本編・16・51・55・57 を切る	23	32
SD11	B8	弥生前期	0.9×0.04		海生土器			
SD25	C4	弥生中期後半	0.40×0.20		海生土器(甕・壺)・ob(石灰石核)・豆	24・35・36を切る		26
SD26	A4	弥生時代	0.16×0.06		海生土器(甕)			
SD32	C3～D1	古墳前期後半	0.65×0.10		土器器(甕)・海生土器	SC24を切る	31	32
SD34	D3～D4	古墳前期後半	1.1×0.12		上:海器(甕)・海生土器・石器	32・56・62を切る	31	32
SD38	A1	弥生前期	0.26×0.14		海生土器			
SD43	D6～D9	古墳前期後半	1.38×0.15		土器器(甕・鉢)・燒土塊・海生土器・石器	0206-13-04新分野地	31	32
SD44	E7～D9	古墳前期後半	1.06×0.11		土器器(甕)・燒土塊・岩穴土器・石器	02・48・49・64を切る	31	32
SD47	E7～E11	弥生終末～古墳 前期後半	7.2+e×0.7		海生土器(甕・壺)・土器器(甕・壺・盆・高环)・土器片凹盤・石器 (鉗・砾石)・燒土塊・灰・石器	新水路と溝井・40・ 41・42を切る	32・33	36
SX39								
SD57	E3～E6	弥生中期後半	1.5×0.50		海生土器(甕・壺・盆・瓶・瓶底無縫・瓢形窓)・石器(磨擦石斧・石斧末 微品・砾石・叩石・石片)・ob(豆・豆)・炉壁・燒土塊・土器片凹盤			26
SD62	D3～D4	古墳前期後半	1.0×0.20		土器器(甕)・焼土器・石器	24・32・56を切る	31	32

報告書抄録

ふりがな	ひえ						
書名	比恵57						
副書名	比恵遺跡群第114次調査報告						
巻次	57						
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	1096						
編著者名	加藤良彦						
編集機関	福岡市教育委員会						
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8-1	TEL092-711-4667					
発行年月日	西暦2010年3月23日						
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
比恵遺跡群 第114次調査	福岡市博多区博多駅南 3丁目59	40132 0127	33° 34° 56"	130° 25° 5°	20080407~20080620	376.6	共同住宅建設
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
比恵遺跡群	集落	弥生 古墳 中世	堅穴住居 溝 防護堤 土塁 井戸	弥生土器・石器・古式土器 器・土師器・炭化米	弥生時代前期～中期前半集落と弥生時代中期後半～中世の墓葬遺構・近畿・山脈など多くの外来系土器出土		

比恵 57

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1096集

2010年（平成22年）3月23日

発行	福岡市教育委員会
	〒810-0001 福岡県福岡市中央区天神1丁目8番1号
印刷	有限会社 アートプロセス
	〒815-0004 福岡市南区高木二丁目8番7号